大手拓次譯詩集

「異國の香」

オリジナル電子化注

©藪野直史《縦書版》

［やぶちゃん注：本訳詩集は、大手拓次の没後七年の昭和一六（一九三一）年三月、親友で版画家であった逸見享の編纂により龍星閣から限定版（六百冊）として刊行されたものである。詩集名は「いこくのかをり」と読む。

底本は国立国会図書館デジタルコレクションの「国立国会図書館内／図書館・個人送信限定」のこちらのものを視認して電子化した。本文は原本に忠実に起こす。例えば、本書では一行フレーズの途中に読点が打たれた場合、その後にほぼ一字分の空けがあるが、再現した。

以下、見返し・扉と続き、次に大手拓次の「序詩」。以下、本文冒頭の「異國のにほひ（ボードレール）」となる。「序詩」は有意にポイント落ちであるが、読み難くなるだけなので、再現しなかった。本一括テクスト注は、ブログ・カテゴリ「大手拓次」での分割公開の完遂を受けて縦書ルビ版PDFとして公開した。各詩篇は必ずページ改行して示したため、多くの空白行があることは、予め、御承知戴きたい。なお、一部の注で示した原詩を読み易くするために、横書版も作成してある。【二〇二三年四月七日藪野直史】］

異國の香

大手拓次譯詩集

異　國　の　香

序　詩　おほて・たくじ

手に微笑の丘を秘めて
うづくまる陰影のいきものは
秋の眞晝のごとく
言葉をかろくにごらせて
とほく彼方の魂をよみがへらす

異國のにほひ　ボードレール

秋のあつたかいゆふぐれに
ふたつの眼をとぢて、　おまへの熱い胸のにほひをすひこむとき
わたしは單調なる太陽の火のきらきらする
幸福の濱べのあらはれるのをみる。

めづらしい樹と美味なる果物とを
自然があたへるところの懶惰の島
へいぼんな、　つよい肉體をもつた男たち
またはれやかな眼でびつくりとさせる女たち
みいられるやうなこの季節にあたり、　お前のにほひにみちびかれて
わたしはぼうつとした海の景色につかれはてながら
帆と帆ばしらとにみちた港をみる。
そのときに空氣のなかをとびめぐり鼻のあないつぱいになる
みどりいろの羅望子（タマリニエ）のにほひが
わたしの靈魂のなかで水夫のうたともつれあふ。

［やぶちゃん注：本篇は「国立国会図書館サーチ」の「ボードレール＝Charles Baudelaire：明治・大正期翻訳作品集成」（ボードレール著／川戸道昭・榊原貴教編集／二〇一六年大空社刊）の書誌で調べたところ、大正六（一九一七）年三月一日発行の『感情』初出であることが判明した。大正六（一九一七）年三月一日発行の『感情』初出であることが判明した。原子朗編「大手拓次詩集」（一九九一年岩波文庫刊）の年譜によれば、当時、大手拓次は満二十九、前年六月に「ライオン歯磨」広告部文案係に就職している。その大正五年十一月には本書の編纂者逸見享ら（社友・同人計八名）とともにボードレールの作品名をとって『異香詩社』を結成、翌年一月に『異香』創刊号を出したが、それ一回で潰れている。原子朗「定本 大手拓次研究」（一九七八年牧神社刊）に、初出『感情』のものに原氏が原詩の三、四連の行空けがないのは、雑誌編集者の恣意とされ（すこぶる同感である）、行空けを施したものを掲げておられる（一九六～一九七頁）ので、以上の正字のものを用いて、以下に再現する。

＊

異國のにほひ　ボードレール

秋のあつたかいゆふぐれに
ふたつの眼をとぢて、おまへの熱い胸のにほひをすひこむとき
わたしは單調なる太陽の火のきらきらする
幸福の濱べのあらはれるのをみる。

めづらしい樹と美味なる果物とを
自然があたへるところの懶惰の島
へいぼんな、つよい肉體をもつた男たち
またはれやかな眼でびつくりとさせる女たち

みいられるやうなこの季節にあたり、お前のにほひにみちびかれて
わたしはぼうつとした海の景色につかれはてながら
帆と帆柱とにみちた港をみる。

そのときに空氣のなかをとびめぐり鼻のあないつぱいになる
みどりいろの羅望子（タマリニエ）のにほひが
わたしの靈魂のなかで水夫のうたともつれあふ。

＊

「羅望子（タマリニエ）」原詩の「tamariniers」。マメ目マメ科ジャケツイバラ亜科タマリンド属タマリンド *Tamarindus indica* の、ここは、その木の茂った葉の匂い。アフリカ原産で、インド・東南アジア・アメリカ大陸などの亜熱帯・熱帯で栽培される。

以下、原詩を示す。フランス語サイト「Les Grands classiques」のこちらのものを、前掲（後者）の原氏の同書に載る原文と校合した。

＊

Parfum exotique　　Charles Baudelaire

Quand, les deux yeux fermés, en un soir chaud d'automne,
Je respire l'odeur de ton sein chaleureux,
Je vois se dérouler des rivages heureux
Qu'éblouissent les feux d'un soleil monotone ;

Une île paresseuse où la nature donne
Des arbres singuliers et des fruits savoureux ;
Des hommes dont le corps est mince et vigoureux,
Et des femmes dont l'oeil par sa franchise étonne.

Guidé par ton odeur vers de charmants climats,
Je vois un port rempli de voiles et de mâts
Encor tout fatigués par la vague marine,

Pendant que le parfum des verts tamariniers,
Qui circule dans l'air et m'enfle la narine,
Se mêle dans mon âme au chant des mariniers.

＊

本篇は詩集「悪の華」（*Les Fleurs du mal*）の初版（一八五七年）に発表したもので、彼が二十歳の時に出逢って、二十年余り同棲生活をした、まさにファム・ファタール（femme fatale：宿命の女）と呼ぶに相応しいパリ・パンテオン座の下っ端女優でサント・ドミンゴ生まれの混血であったジャンヌ・デュバル（Jeanne Duval　一八二〇年～一八六二年）を讃えた一群の「ジャンヌ・デュバル詩篇」の一つとしてよく知られるものである。原氏も讃えておられるが、何より、本篇の訳は後代の知られた訳者らからは、飛び抜けて古いにも拘らず、拓次は逐語的ではなく、しかも、ボードレールの詩想をしっかりとつらまえ、さらに、「オホテ・タクジ・ワールド」の自家薬籠中のものくと変じていて、実に素晴らしい。なお、以下のボードレールの詩篇は総て「悪の華」に載る詩篇である。」

夢幻の彫刻　ボードレール

奇妙な化物ははれのかざりに、
ただ、　異形の風をする醜い冠を
その痩骨の頭のうへにをかしくのつけてゐた。
拍車もなく、　鞭もなく馬をあへがせる、
てんかん病みのやうに鼻から泡をふく
その身とおなじやうな妖精の不思議な駑馬を。
空間をよぎりて彼等ふたりは沒し、
おぼつかない蹄のはてなさを押しせまる。
騎士はその馬のふみしだく名もない群のうへに
もへたつ刀（かたな）をひらめかす。
そしてわが家を監視する王侯のやうに、
無限の、寒冷の、境界なき墓場を徘徊する、
そこに、白い艶のない太陽の微光のなかに
古今史上の人人はかくれふしてゐる。

［やぶちゃん注：本篇は「国立国会図書館サーチ」の「ボードレール＝Charles Baudelaire：明治・大正期翻訳作品集成」（ボードレール著／川戸道昭・榊原貴教編集／二〇一六年大空社刊）の書誌で調べたところ、大正四（一九一五）年四月一日発行の『地上巡禮』初出であることが判明した。標題は「彫刻」とあるが、以下の原詩や、記すところの創作事実に従うなら、‘gravure’は「版畫」と訳すべきところである。

「駑馬」「どば」。足ののろい馬。

所持する堀口大學譯「惡の華　全譯」（昭和四二（一九六七）年新潮文庫刊。この本の優れている点は歴史的仮名遣・正字版であることである）の本篇（堀口氏の標題訳は「或る版畫の幻想」である）の訳者註に、『雜誌『現在』一八五七年十一月十五日號に發表』されたもので、『この時の題は「モーテイマーの版畫」といふ表題だつた』。『モーテイマー（一七四一年――一七七〇年）は怪奇な題材を好んで扱ったイギリスの畫家』とある。但し、壺齋散人（引地博信）氏のサイト「フランス文学と詩の世界」の「幻想的な版画（ボードレール：悪の華）」によれば、『この詩は、モーチマーの原作をもとにしたヘインズの版画「馬上の死神」に触発されて書いたものだ。1784 年に出版されている』。『版画そ

のものは、死をテーマにしている。だが単に死のおぞましさを表現するだけでなく、それを生との対比で描いていることは、死神がカーニバルの王冠をかぶっていることに表されている』。『ボードレールはそこに詩情を感じたのであろう』と解説され、当該のイインズの版画も画像で見ることが出来る。この原作家であるが、複数の作品のタッチからみて、ロンドン生まれの画家・版画家ジョン・ハミルトン・モーティマー（John Hamilton Mortimer　一七四〇年～一七七九年：堀口のそれは誤り）で、インスパイアしたのは、イギリスの画家・版画家ジョセフ・ヘインズ（Joseph Haynes　一七六〇年～一八二九年）であることが、判明した。英文サイト「alamy」のこちらにイインズのそのエッチングが載り、そこに“ Death on a Pale Horse - 1784, after the drawing of 1775 - Joseph Haynes (English, 1760-1829) after John Hamilton Mortimer (English, 1740-1779) -Captions are provided by our contributors.”という注意書きで確定である。モーティマーの原画は Wikimedia のここで巨大な精細図が見られる。これを見ると、両者は非常によく似ており、而して当然、孰れの画題も「蒼ざめた馬の上の死神」である。以下、ボードレールの原詩を示す。英文サイトの英訳附きのページのものを使用し、他のものと校合確認した。

＊

Une gravure fantastique　　Charles Baudelaire

Ce spectre singulier n'a pour toute toilette,
Grotesquement campé sur son front de squelette,
Qu'un diadème affreux sentant le carnaval.
Sans éperons, sans fouet, il essouffle un cheval,
Fantôme comme lui, rosse apocalyptique,
Qui bave des naseaux comme un épileptique.
Au travers de l'espace ils s'enfoncent tous deux,
Et foulent l'infini d'un sabot hasardeux.
Le cavalier promène un sabre qui flamboie
Sur les foules sans nom que sa monture broie,
Et parcourt, comme un prince inspectant sa maison,
Le cimetière immense et froid, sans horizon,
Où gisent, aux lueurs d'un soleil blanc et terne,
Les peuples de l'histoire ancienne et moderne.

＊］

交　通　ボードレール

自然は生きてゐる柱から
ときとして錯雑した言葉を出さしめる寺である、
親しみ深い注意でそれを見る人は
象徴（サンボル）の森をとほりてそこへゆく。

遠くより、隠密なる深い統一のなかに
冥合する遙かなる木靈のやうに、
夜（よる）のやうに、　又光明のやうにひろく、
匂ひと、色と、音とは相答へる。

それは子供の肉のやうに潑溂たる匂ひである、
笛の音のやうにこころよく、　牧場のやうにみどりである。
そして腐れたるもの、　ゆたかに誇揚するものは、
琥珀や麝香、安息香（バンジオアン）や薫香（アンサン）のやうな、
無限のもののひろがりを持つて、
靈と官能との感激を歌つてゐる。

［やぶちゃん注：本篇は「国立国会図書館サーチ」の「ボードレール＝Charles Baudelaire：明治・大正期翻訳作品集成」（ボードレール著／川戸道昭・榊原貴教編集／二〇一六年大空社刊）の書誌で調べたところ、前の「夢幻の彫刻」と同じ大正四（一九一五）年四月一日発行の『地上巡禮』初出であることが判明した。

標題（原詩「*correspondance*」）は「交通」とあるが、以下に示す原詩と、その詩想からは、こなれた訳とは言えない（但し、「交通」や「鉄道等交通機関の乗換（駅）」の意はある）。第一義の「符合」「合致」「合一」「調和」「対応」「照応」或いは「交感」「呼応」が相応しい。対象物との精神の深いところでの「交感」（「交通」）を指す。堀口大學「惡の華　全譯」（昭和四二（一九六七）年新潮文庫刊）では「呼應」と訳しており、同詩集の冒頭の「憂鬱と理想」（*Spleen et Idéal*）の中でも彼の詩的琴線を表わす象徴的な一篇である。堀口はこの詩に注して、『この詩の主題はボードレールには譜代の親しいもの』で、彼の『美術評論』『一八四六年のサロン』の中にも、色彩と音響と香氣の間の呼應を說いたホフマンの『クライ

スレリアナ』の一節を引用したりして』おり、『また、この詩の第一、第二連の両節は、自分の評論文『リヒヤルト・ワグネルとタンホイザー』中に引用してゐる』とある。

「木靈」「こだま」。

「琥珀」植物の樹脂が化石となったもの。黄褐色か黄色を呈し、樹脂光沢を持ち、透明か半透明。石炭層に伴って産出する。想像を絶する時間を隔てて自然が作り上げた秘宝の象徴物の一つであり、特定の条件で琥珀を燃やした際、松の木を燃やしたような香りがすることから、古くから香料として用いられ、漢方医薬として用いられることもあった。

「麝香」雄のジャコウジカ（鯨偶蹄目反芻亜目真反芻亜目ジャコウジカ科ジャコウジカ亜科ジャコウジカ属 *Moschus* に七種が現生する）の腹部にある香嚢（こうのう）（麝香腺）から得られる分泌物を乾燥したもので、主に香料や薬の原料として用いられてきた。甘く粉っぽい香りを持ち、香水の香りを長く持続させる効果があるため、香水の素材として古くから重要なものであった。また、興奮作用・強心作用・男性ホルモン様作用といった薬理作用を持つとされて、本邦でも伝統的な秘薬として使われてきた。ジャコウジカ及び麝香の詳しい博物誌は私の「和漢三才圖會卷第三十八　獸類　麝（じゃかう）　（ジャコウジカ）」を参照されたい。

「安息香（あんそくこう）（バンジオアン）」安息香はツツジ目エゴノキ科エゴノキ属のアンソクコウノキ *Styrax benzoin*、またはその他同属植物が産出する樹脂で、それらの樹木の幹に傷をつけ、そこから滲み出た樹液の固化した樹脂として採集する。主要な成分は芳香族カルボン酸とそのエステルで、古くから香料として利用されてきた。

「薫香（アンサン）」原詩の「l'encens」であるが、これは第一義的には特定の香料を指すのではなく、以上の三種のような神秘的なそれら等を薫じた「香」（こう／かおり）を言う。但し、原詩を見るに、上記三種と並列してあることから、私は香味料として古代から用いられてきたシソ目シソ科アキギリ属 ローズマリー *Salvia rosmarinus* のことを指しているものではないかと考えた。所持するフランス語辞書の「encens」の最後に『まんねんろう』とあり、これはマンネンロウ（迷迭香）でローズマリーの和名であるからである。しかし、個人ブログ「ボエム・ギャラント」の『ボードレール「コレスポンダンス」（万物照応）Correspondances』（この「万物照応」は本詩篇の邦訳題としてよく用いられるものであり、これはなかなかに良い訳と思う。この拓次の表題「交通」が「萬物照應」とあったとなら、詩想の吸収は遙かに躓かないからである）では、これを「乳香」（にゅうこう）と訳しておられる。これはムクロジ目カンラン（橄欖）科ボスウェリア属ボスウェリア・カルテリィ *Boswellia carterii* などの同属の北アフリカ原産の常緑高木から採取される樹脂で、芳香があり、古代エジプト以来、薫香料として用いられてきたものであり、並列に相応しい。**而してフランス語の「乳香」Encens（résine oliban）」の冒頭にも、別名として「L'encens」とあることから、ここは「乳香」と訳すべきところ**と思う。

以下、原詩を示す。英文サイトの英訳附きのページのものを使用し、壺齋散人（引地博信）氏のサイト「フランス文学と詩の世界」の「交感（ボードレール：悪の華）」によっ

て連を決定稿の形である四連構成で示した。なおそちらによれば、『この詩はボードレールの比較的若い頃に書かれていたとする説もあるが、1855年に「両世界評論」に発表した18篇の中には含まれていない。おそらく』「悪の華」『初版の刊行』（一八五七年）『に併せて、新たに書いたものだと思われる。』とある。

＊

Correspondances Charles Baudelaire

La Nature est un temple où de vivants piliers
Laissent parfois sortir de confuses paroles;
L'homme y passe à travers des forêts de symboles
Qui l'observent avec des regards familiers.

Comme de longs échos qui de loin se confondent
Dans une ténébreuse et profonde unité,
Vaste comme la nuit et comme la clarté,
Les parfums, les couleurs et les sons se répondent.

II est des parfums frais comme des chairs d'enfants,
Doux comme les hautbois, verts comme les prairies,
— Et d'autres, corrompus, riches et triomphants,

Ayant l'expansion des choses infinies,
Comme l'ambre, le musc, le benjoin et l'encens,
Qui chantent les transports de l'esprit et des sens.

＊

以上のように、本篇は四連構成とするのが、諸訳者でも共通しており、原子朗編「大手拓次詩集」（一九九一年岩波文庫刊）の「翻訳篇」でも四連構成に変えてある。以上の正字のものを、そのようにして以下に示す。

＊

交通（コレスポンダンス） ボードレール

自然は生きてゐる柱から
とぎとして錯雑した言葉を出さしめる寺である、

親しみ深い注意でそれを見る人は
象徴（サンボル）の森をとほりてそこへゆく。

遠くより、　隠密なる深い統一のなかに
冥合する遙かなる木靈のやうに、
夜（よる）のやうに、　又光明のやうにひろく、
匂ひと、　色と、　音とは相答へる。

それは子供の肉のやうに潑溂たる匂ひである、
笛の音のやうにこころよく、　牧場のやうにみどりである。
そして腐れたるもの、　ゆたかに誇揚するものは、

琥珀や麝香、安息香（パンジオアン）や薫香（アンサン）のやうな、
無限のもののひろがりを持つて、
靈と官能との感激を歌つてゐる。

＊

恐らく、拓次は第三連末がコンマとなっているのを意識して、確信犯でかく処理したものとは推察出来る。」

憑き人（つき）　ボードレール

太陽は黒布（クレープ）でおほはれた。
そのやうにわたしの命（ヴィ）の月も影につつまれよ、
おまへの隨意に鍍金し、　あるひは煙らせよ、
また沈默にほのぐらくたもちつつ、　退屈のふかみにのこりなくしづみゆけ。

わたしはこのやうにお前を愛する。　しかしおまへが今にも、
半影（ペノンブル）から生ずるかげつた星のやうに
道化役がじやまをする場所におまへを誇らうとするならばそれもよい！
妖靈なる短刀（ポアナール）はおまへの鞘からはしりでよ！
燭臺の焰におまへの瞳を點火せよ！
野人の注意のなかに希望を點火せよ！
おまへのすべては、わたしにとつて纖麗なせはしい娯樂である。

おまへの望むものは、くろい夜、　くれなゐの曙であれ、
ふるへてゐる私の全身の筋（すぢ）は一つとして
『お親しいペルゼエブスよ、私はお前を禮拜する』と叫ばないものはない。

［やぶちゃん注：原詩の標題「*Le Possédé*」は「悪魔にとり憑かれた人」の意。「狂人」の意もある。堀口大學譯「惡の華　全譯」（昭和四二（一九六七）年新潮文庫刊）の本篇（堀口氏の標題訳は「憑かれた男」である）の訳者註に、『雜誌『フランス評論』一八五九年一月二十一日號に發表』としつつも、『原稿によると』前年『一八五八年の作』とする。
「黒布（クレープ）」以下に示す通り、原詩の「縮み織りで作った黒い喪章のベール」を意味する「crêpe」の音写をそのままルビとした。
「命（ヴィ）」同前で「vie」、「生命・生・人生・一生・生涯」のそれ。
「月」「つき」。言うまでもないが、「Lune」であるから、英語の「Moon」のそれ。彼の人生自体が自らは輝かない月のようなネガティヴなものなのである。
「鍍金（めっき）」「メッキ」。**しかし、拓次はこの一行の前半を致命的に誤読している。頭の「Dors」は「眠る」の意の「dormir」の現在分詞であるのを、「金鍍金（めっき）する」の意の「dorer」と取り**

違えてしまっている。この頭は「好きなだけ眠ったり、煙草を吹かしたりしていいが、」である。

「退屈」原詩では「Ennui」。個人的には「アンニュイ」とルビするか、「倦怠」としたい気がする。

「半影（ペノンブル）」原詩の「pénombre」の音写をルビしたもの。物理学用語では確かに「半影」であるが、「絵画の明暗の境目（さかいめ）」や単に「薄暗がり」をも意味する。ここは最後の「薄暗がりから」の方が、以下との表現との関係上では、分りいいように感じる。

「かげった星」原詩の「éclipsé」は「エクリプス」でお馴染みの「日食」のことであるが、ここは日食のように全部或いは一部が触（しょく）を起こして欠けている状態から、原形を漸く僅かずつ現わすように、見かけ上、見えるような感じで、という比喩を言っているものととる。

「道化師」原詩では、「la Folie」と大文字になっているのに着目すると、腑に落ちる。通常、この単語は「狂気」・「熱狂」・「馬鹿げた滑稽なこと」の意であるが、大文字で「快活を象徴する独特の帽子を被り、鈴を付け、錫杖を持った人物」とあるからである。

「短刀（ポアナール）」「poignard」は「短刀」の意であるが、音写は「ポワニャール」に近い。

「おまくのすべては、わたしにとって繊麗なせはしい娯樂である。」「morbide ou pétulant;」が訳されていない。「病的か、激しく手に負えない存在であっても、」。

「ベルゼブス」「Belzébuth」はフランス語の音写は「ベルゼビュート」に近い。所謂、「蠅の王」（「糞の王」とも）の意の、現在ではキリスト教の悪魔の中でも強大凶悪の存在とされる「ベルゼブブ」（ラテン語：Beelzebub）のことである。

以下、英訳付きの英文サイトのものを、フランス語サイトのこちらのものと校合した。

＊

Le Possédé Charles Baudelaire

Le soleil s'est couvert d'un crêpe. Comme lui,
Ô Lune de ma vie ! emmitoufle-toi d'ombre;
Dors ou fume à ton gré; sois muette, sois sombre,
Et plonge tout entière au gouffre de l'Ennui;

Je t'aime ainsi! Pourtant, si tu veux aujourd'hui,
Comme un astre éclipsé qui sort de la pénombre,
Te pavaner aux lieux que la Folie encombre,
C'est bien ! Charmant poignard, jaillis de ton étui !

Allume ta prunelle à la flamme des lustres !
Allume le désir dans les regards des rustres !
Tout de toi m'est plaisir, morbide ou pétulant;

Sois ce que tu voudras, nuit noire, rouge aurore;
Il n'est pas une fibre en tout mon corps tremblant
Qui ne crie: Ô mon cher Belzébuth, je t'adore!

＊

以上のように、本篇も四連構成とするのが、諸訳者でも共通しており、原子朗編「大手拓次詩集」（一九九一年岩波文庫刊）の「翻訳篇」でも四連構成に変えてある。以上の正字のものを、そのようにして以下に示す。

＊

憑き人（つ）　ボードレール

太陽は黒布（クレープ）でおほはれた。
そのやうにわたしの命（ヴィ）の月も影につつまれよ、
おまへの隨意に鍍金し、　あるひは煙らせよ、
また沈默にほのぐらくたもちつつ、　退屈のふかみにのこりなくしづみゆけ。

わたしはこのやうにお前を愛する。　しかしおまへが今にも、
半影（ペノンブル）から生ずるかげつた星のやうに
道化役がじやまをする場所におまへを誇らうとするならばそれもよい！
妖靈なる短刀（ポアナール）はおまへの鞘からはしりでよ！

燭臺の焰におまへの瞳を點火せよ！
野人の注意のなかに希望を點火せよ！
おまへのすべては、わたしにとつて纖麗なせはしい娯樂である。

おまへの望むものは、くろい夜、　くれなゐの曙であれ、
ふるへてゐる私の全身の筋（すぢ）は一つとして
『おお親しいペルゼエブスよ、私はお前を禮拜する』と叫ばないものはない。

＊」

縁（ふち）　ボードレール

うつくしい縁（ふち）が繪につけくはへるやうに、
その繪がどんなにほむべき筆づかひであらうとも、
わたしは無限の自然からはなれては、
不思議も恍惚もあらうとは思はない。

それとひとしく、寶玉（ビジウ）も、　裝飾品（ムーブル）も、　メタルも金箔（ドリユール）も、
かの女（ぢよ）のたぐひない美しさにしつくりあてはまるとはおもはない、
彼女のまどかなる玲瓏をかくすものは何ひとつとしてなく、
ただすべては縁飾（ふちかざ）りとなつてつかへてゐるやうに見えた、

それにまた、　だれもみんな自分を愛さうとしてゐのだといふ、
彼女は繻子やリンネルの接吻（せつぺエゼ）のなかにひたつた、

彼女の美しい裸躰は身ぶるひにみちて、
そして、　おそく或はすみやかに彼女のひとつひとつの動作は
猿（サンジユ）のやうな子供らしい愛嬌をふりまく。

［やぶちゃん注：本篇は実際には単独の詩篇ではなく、四パートから成る総標題「*Un Fantôme*」（「ある幽霊（亡霊）」）或いは「ある幻想」）の第三篇である。全体は「I *Les ténèbres*」（「闇」）・「II *Le Parfum*」（「香（こう）」）・**III *Le Cadre*（「額縁」）**・「IV *Le Portrait*」（肖像）から成るものである。原子朗「定本 大手拓次研究」（一九七八年牧神社刊）の一八八～一八九ページに拓次の訳出したボードレールの『悪の華』からの詩篇リストがあるが、それによれば（そこでは総標題は「幻想」と訳されている）、原詩の内、拓次は実はこの詩篇を「I　暗黒」・「II　香氣」・「III　縁」と訳しながら、「IV」は訳していないとする。ここでは、「III　Le Cadre」のみの原詩をフランス語のサイト「Le cadre de Charles BAUDELAIRE dans 'Les Fleurs du Mal'」のこちらから引く。

＊

Le cadre　　Charles Baudelaire

Comme un beau cadre ajoute à la peinture,
Bien qu,elle soit d,un pinceau très vanté,
Je ne sais quoi d'étrange et d'enchanté
En l'isolant de l'immense nature,

Ainsi bijoux, meubles, métaux, dorure,
S'adaptaient juste à sa rare beauté ;
Rien n' offusquait sa parfaite clarté,
Et tout semblait lui servir de bordure.

Même on eût dit parfois qu'elle croyait
Que tout voulait 'aimer ; elle noyait
Sa nudité voluptueusement

Dans les baisers du satin et du linge,
Et lente ou brusque, à chaque mouvement
Montrait la grâce enfantine du singe.

＊

「寶玉（ビジウ）」原詩の「bijoux」（音写は「ビジュウ」）は「宝石」の意。
「裝飾品（ムーブル）」同前で「meubles」（「マームブル」）は「調度・家具」。
「メタル」「métaux」（メトゥ）は「金属」であるが、ここは前を受けて装飾用の金銀等で出来た豪華な「金具」の意でよかろう。
「金箔（ドリュール）」「dorure」（「ドロュール」）は「金箔」「金鍍金」の意。
「繻子」「しゅす（しゅす）」と読む。精錬した絹糸を使った繻子織（しゅすおり）の織物。経糸（たていと）・緯糸（よこいと）それぞれ五本以上から構成され、経・緯どちらかの糸の浮きが非常に少なく、経糸又は緯糸のみが表に表われているように見える織り方で、密度が高く、地は厚いが、柔軟性に長け、光沢が強い。但し、摩擦や引っ掻きには弱い。「サテン」。原詩の「Satin」がそれ。但し、フランス語では音写は「サアタン」に近い。
「リンネル」「linge」（「ラーンジュ」）で、「家庭用布類」「ホーム・リネン」のこと。
「接吻（ベゼ）」「baisers」（「ベェゼイ」）。ドイツ語の同義の「baiser」はしばしば「ベエゼ」「ベーゼ」とカタカナ書きするのが普通だが、実際のドイツ語では「ビィゼィ」に近い。
「猿（サンジュ）」「singe」（「サーンジュ」）。「猿・雄猿」。

なお、堀口大學譯「惡の華　全譯」（昭和四二（一九六七）年新潮文庫刊）の本篇（堀口氏の標題訳は「或る幽靈」である）の訳者註には、本篇全体は雑誌『『藝術家』一八六〇年十月十五日號に發表』とし、既に述べた『ジャンヌ・デュバル詩篇』としつつ、『この年デユヴァルはアルコールの過飲から激しいリューマチスにかかつて動けなくなりデュボア慈善病院に入院治療した。この詩はその不在の間の作だらうと見られてゐる』とある。

さて、原子朗「定本 大手拓次研究」（一九七八年牧神社刊）の「補章」の「1　訳詩をめぐって」の三七四～三七五ページには、初出形が示されてあるのだが、これが以上のものとは大きく異なるのである。その前振りで、原氏は、『この拓次訳「縁」は現存する自筆草稿によれば大正三』（一九一四）『年八月十一日』（満二十六歳。大早稲田大学英文科卒業後三年目であるが、就職せず、困窮の中で作詩していた）『に成ったことが日付けの記入によって明らかだが、最初「枠」と訳した題名を「縁」にあらため、北原白秋の主宰する「地上巡礼」の大正四年一月号に、ほか八篇とともに（訳詩五篇、創作詩四篇）発表している』として、以下にその初出形（多分、その自筆原稿）が示されてある。以上の本篇の漢字表記に従って恣意的に正字化したものを以下に示す。太字は底本では傍点である。

本詩集のそれとは、大いに異なるので注意して読まれたい。

＊

縁（ふち）　ボードレール

うつくしい縁（ふち）が繪につけくはへるやうに、
その繪がどんなにほむべき筆づかひであらうとも、
わたしは無限の自然からはなれては、
不思議も恍惚もあらうとは思はれない。

それとひとしく、　寶玉（ビジウ）も、　裝飾品（ムーブル）も、　メタルも金箔（ドリユール）も、
かの女（ぢよ）のたぐひない美しさにしつくりあてはまるとはおもはない。
彼女がまどかなる玲瓏をかくすものは何ひとつとしてなく、
ただすべては縁飾りとなつてつかへてゐるやうに見えた。

それにまた、　だれもみんな自分を愛さうとしてゐのだといふ、
彼女の所信を世人はをりふし噂にのぼらすだらう。
彼女は繻子やリンネルの接吻（ベエゼ）のなかにひたつた、

彼女のうつくしい裸躰は身ぶるひにみちて、
そして、　おそく或はすみやかに彼女のひとつびとつの動作は
猿（サンジュ）のやうな子供らしい愛嬌をふりまく。

香　　氣　ボードレール

貪食者よ、　お前はをりにふれて
迷亂と緩漫なる貪食とをもつて呼吸したことがあるか、
あの聖堂のなかにみちてゐる燒香の顆粒（つぶ）を、
あるひは麝香のふかくしみこんだ香袋（にほひぶくろ）を。

現在とよみがみがへれる過去とのなかに
われらを醉はしむる深く不思議なる妖惑よ！
かくしてこひ人は鐘愛のからだのうへに
追憶の美妙なる花をつみとる。

彈力のあるおもい彼女の頭髮から、
寢室の香爐であるにほひ袋の
いきいきしたかをりはのぼつた、　あらく茶色に、

また、清い若さのすつかりしみこんだ寒冷紗か或はびろうどの着物からは、
毛皮のにほひがのがささる。

［やぶちゃん注：これは既に「縁（ふち）」で紹介した**総標題「*Un Fantôme*」（「ある幽霊（亡霊）」或いは「ある幻想」）の四篇構成のそれの第二篇**である。フランス語のサイトのこちらにあるものを元に示す。

＊

Le Parfum　　Charles Baudelaire

Lecteur, as-tu quelquefois respiré
Avec ivresse et lente gourmandise
Ce grain d'encens qui remplit une église,
Ou d'un sachet le musc invétéré?

Charme profond, magique, dont nous grise

Dans le présent le passé restauré!
Ainsi l'amant sur un corps adoré
Du souvenir cueille la fleur exquise.

De ses cheveux élastiques et lourds,
Vivant sachet, encensoir de l'alcôve,
Une senteur montait, sauvage et fauve,

Et des habits, mousseline ou velours,
Tout imprégnés de sa jeunesse pure,
Se dégageait un parfum de fourrure.

＊

「貪食者」不審。「Lecteur」はフラットに「読者」の意で、このような意味はない。或いは拓次は『「貪」欲なる『食』欲の持ち主である読「者」』のニュアンスで、二行目の「貪食」(「gourmandise」は「大喰い」の意)を意識して、かく読む人々に皮肉を込めて訳したものか？　しかし、「どんしょくしゃ」の訓は「讀書者(どくしょしゃ)」に似ており、何か妙な気が、しないでもないのである。
「鍾愛」は「しょうあい（しょうあい）」でと読み、「鍾」は「集める」の意で、「たいそう好いてこのむこと・大切にして可愛がること」を言う語である。」

音　樂　ボードレール

音樂は　をりをりに　海のやうに私をうばふ！
あをじろい　わたしの星にむかつて、
はてしない　霧のふかみに　また　ひろびろとした空のなかに
わたしは帆をあげてゆく。
帆布のやうに
胸をはり　肺に息をすひこんで、
夜の闇におほはれはてた
たかまれる波の背に　わたしはよぢのぼる。

なやめる船の
そのさまざまの苦しみに　わたしは身ぶるひをする。
おひての風も　暴風も　その動亂も
底しれぬ淵のまうへに
わたしを　ゆりゆり眠らせる。——また或時は　なぎやはらいで、
わたしの絶望の大きな鏡！

［やぶちゃん注：原詩は以下。フランス語のサイトのこちらからコピーした。**朗読も聴ける。**

＊

La Musique　　Charles Baudelaire

La musique souvent me prend comme une mer !
Vers ma pâle étoile,
Sous un plafond de brume ou dans un vaste éther,
Je mets à la voile ;

La poitrine en avant et les poumons gonflés
Comme de la toile
J'escalade le dos des flots amoncelés

Que la nuit me voile ;

Je sens vibrer en moi toutes les passions
D'un vaisseau qui souffre ;
Le bon vent, la tempête et ses convulsions

Sur l'immense gouffre
Me bercent. D'autres fois, calme plat, grand miroir
De mon désespoir !

＊

本篇は四連構成とするのが、諸訳者でも共通しており、原子朗編「大手拓次詩集」（一九九一年岩波文庫刊）の「翻訳篇」でも四連構成に変えてある。以上の正字のものを、そのようにして以下に示す。但し、**不審な箇所がある**。

＊

音　樂　ボードレール

音樂は　をりをりに　海のやうに私をうばふ！
あをじろい　わたしの星にむかつて、
はてしない　霧のふかみに　また　ひろびろとした空のなかに
わたしは帆をあげてゆく。

帆布（ほぬの）のやうに
胸をはり　肺に息をすひこんで、
夜の闇におほはれはてた
たかまれる波の背に　わたしはよぢのぼる。

なやめる船の
そのさまざまの苦しみに　わたしは身ぶるひをする。
おひての風も　暴風も　その動亂も

底しれぬ淵のうへに
わたしを　ゆりゆり眠らせる。——また或時は　なぎやはらいで、
わたしの絶望の大きな鏡！

＊

最終連の一行目が詩集本文では、「底しれぬ淵のまうへに」であるのに、「ま」が除去されている。不審である。」

幽　靈　ボードレール

黃褐色（かついろ）の眼の天使のやうに
わたしは　お前の寢間へかへつてこよう、
そして　夜のもののかげとともに
おともなく　お前の方へすべつてゆかう。
そしてお前にあたへよう　ほのぐろい女よ、
月のやうなつめたい接吻を
また　穴のまはりを匍ひあるく
蛇（へび）の愛撫を。

あをざめた朝がくるときに
お前は　空しいわたしのあとを見るだらう、
けれどもそこは　夕暮までつめたいだらう。

他のひとびとが優（やさ）しさでするやうに、
お前の命のうへに　またその若さのうへに
わたしは　怖ろしさで君臨しよう！

［やぶちゃん注：「ジャンヌ・デュバル詩篇」の一つ。原詩は英訳付きのこちらから引いた。フランス語サイトのものと校合した。

＊

Le Revenant　　Charles Baudelaire

Comme les anges à l'oeil fauve,
Je reviendrai dans ton alcôve
Et vers toi glisserai sans bruit
Avec les ombres de la nuit;

Et je te donnerai, ma brune,
Des baisers froids comme la lune
Et des caresses de serpent

Autour d'une fosse rampant.

Quand viendra le matin livide,
Tu trouveras ma place vide,
Où jusqu'au soir il fera froid.

Comme d'autres par la tendresse,
Sur ta vie et sur ta jeunesse,
Moi, je veux régner par l'effroi.

＊

本篇は四連構成とするのが、諸訳者でも共通しており、原子朗編「大手拓次詩集」（一九九一年岩波文庫刊）の「翻訳篇」でも四連構成に変えてある。但し、**そちらでは、同一詩篇の訳が二種あり（初訳版の標題は「亡靈」）、後の再訳版が連構成と一部のルビを除いて完全に一致する。その二種を以下に初訳・再訳の順で示す。漢字は恣意的に正字化し、中途読点の後も同じく一字分を空けた。**

＊

亡　靈　ボードレール

茶褐色の眼を持つた天使のやうに
わたしはお前の寢部屋のなかに歸つてゆかう、
そしてお前の方へ音もなく、　夜の影と共にすべつてゆかう。

わたしはお前に與へよう、　暗い女よ、
月のやうなつめたいベーゼを。
又、　穴のまはりに這(は)つてゐる
蛇の慈愛を。

鉛色の朝が來るとき
お前はわたしの空しい場所を見出すだらう、
それで夕方までに凍つてしまふだらう。

ほかの人が親切をするやうに
お前の命の上に、　お前の若さの上に、
わたしは、　恐怖をもつて支配しよう。

＊

幽　靈　ボードレール

黄褐色の眼の天使のやうに
わたしは　お前の寢間へかへつてこよう、
そして　夜のものかげとともに
おともなく　お前の方へすべつてゆかう。

そしてお前にあたへよう　ほのぐろい女よ、
月のやうなつめたい接吻を
また　穴のまはりを匍ひあるく
蛇の愛撫を。

あをざめた朝がくるときに
お前は　空しいわたしのあとを見るだらう、
けれどもそこは　夕暮までつめたいだらう。

他のひとびとが優しさでするやうに、
お前の命のうへに　またその若さのうへに
わたしは　怖ろしさで君臨しよう！

＊」

美しい船　ボードレール

わたしはおまへに話したい　おお　よわよわしい　たをやめよ
おまへの若さをかざる　さまざまの美しさを、
わたしはおまへをゑがいてみたい
おとなびてゆく　をさな姿の美しさを。

おまへが　ひろいもすそで　風をはらひながらゆくときは
沖へでてゆく　美しい船ともみえる、
亞麻布（リンネル）をつみ　ただよひながら
こころよい　またものうい　しづかな調（しらべ）につれて　うねりゆく。

おまへの　おほきいまるい頸（くび）のうへに　ふつくりとした肩のうへに
おまへのあたまは　ふしぎな媚をみせびらかす、
おだやかで　また　かちほこつたやうな風（ふり）をして
おまへは　みちをゆきすぎる　いかめしい子供よ。

わたしはおまへに話したい　おお　よわよわしい　たをやめよ
おまへの若さをかざる　さまざまの美しさを、
わたしはおまへをゑがいてみたい
おとなびてゆく　をさな姿の美しさを。

つきだして　波模様の絹をはりひろげる　おまへの胸は
揚揚（やうやう）としたおまへの胸は　うつくしい衣裳戸棚、
楯のやうにあざやかな　そのふくらんだ鏡板（かがみいた）は
かがやくひらめきを　とめてゐる。

ばらいろの星でよろうた　そそのかすやうな楯よ！
葡萄酒と　香料と　芳香（リクウル）と
美しいものにみちみち　心やあたまを狂はせる
あまい　祕密の衣裳戸棚よ！

おまへが　ひろいもすそで　風をはらいながらゆくときは

沖へでてゆく　美しい船ともみえる、
亞麻布（リンネル）をつみ　ただよひながら
こころよい　またものうい　しづかな調（しらべ）につれて　うねりゆく。

おひのける　もすそのしたにみやびたおまへのふたつの脛（はぎ）は
ふかい甕（かめ）のなかで　くろい媚藥（ほれぐすり）を煉つてゐる
ふたりの魔術師のやうにも
えもわかぬ望みをくるしめ　そそりたてる。

早熟な怪力者（エルキユウル）をなぶるやうなおまへの腕は
かがやく蛇の　たくましい好敵手、
また　おまへの胸におしつけるやうに　戀人を
しふねくも　だきしめるのにふさはしい。

おまへの　おほきいまるい頸（くび）のうへに　ふつくりとした肩のうへに
おまへのあたまは　ふしぎな媚をみせびらかす
おだやかで　また　かちほこつたやうな風（ふり）をして
おまへは　みちをゆきすぎる　いかめしい子供よ。

［やぶちゃん注：見るからに判る「ジャンヌ・デュバル詩篇」の一つ。**実は第五連と第六連は改ページとなっていて、物理的には行空けがない。しかし、第五連の最終行の句点と、全体のバランスから考えても、何より、後に掲げる原詩からも、ここは行空けが相当である。改ページであることから、編者逸見氏が気にしなかったものとも思われるので、特異的に一行空けて分離した。**それ以外に、ちょっと不審がある。それは、第五連の「芳香（リクウル）」で、これは原詩を見るまでもなく、「リクウル」から「芳香酒」とあるべきところであろう。原子朗編「大手拓次詩集」（一九九一年岩波文庫刊）でも、そうなっている（恐らくは同氏の「大手拓次研究」（一九七八年牧神社刊）の一八八～一八九ページに拓次の訳出したボードレールの『悪の華』からの詩篇リストにある『同題遺稿あり』とあるものに基づくものかと思う）。原詩をフランス語サイトのこちらのものを使用した。

＊

Le beau navire　　Charles Baudelaire

Je veux te raconter, ô molle enchanteresse !

Les diverses beautés qui parent ta jeunesse ;
Je veux te peindre ta beauté,
Où l'enfance s'allie à la maturité.

Quand tu vas balayant l'air de ta jupe large,
Tu fais l'effet d'un beau vaisseau qui prend le large,
Chargé de toile, et va roulant
Suivant un rythme doux, et paresseux, et lent.

Sur ton cou large et rond, sur tes épaules grasses,
Ta tête se pavane avec d'étranges grâces ;
D'un air placide et triomphant
Tu passes ton chemin, majestueuse enfant.

Je veux te raconter, ô molle enchanteresse !
Les diverses beautés qui parent ta jeunesse ;
Je veux te peindre ta beauté,
Où l'enfance s'allie à la maturité.

Ta gorge qui s'avance et qui pousse la moire,
Ta gorge triomphante est une belle armoire
Dont les panneaux bombés et clairs
Comme les boucliers accrochent des éclairs,

Boucliers provoquants, armés de pointes roses !
Armoire à doux secrets, pleine de bonnes choses,
De vins, de parfums, de liqueurs
Qui feraient délirer les cerveaux et les coeurs !

Quand tu vas balayant l'air de ta jupe large,
Tu fais l'effet d'un beau vaisseau qui prend le large,
Chargé de toile, et va roulant
Suivant un rythme doux, et paresseux, et lent.

Tes nobles jambes, sous les volants qu'elles chassent,
Tourmentent les désirs obscurs et les agacent,

Comme deux sorcières qui font
Tourner un philtre noir dans un vase profond.

Tes bras, qui se joueraient des précoces hercules,
Sont des boas luisants les solides émules,
Faits pour serrer obstinément,
Comme pour l'imprimer dans ton coeur, ton amant.

Sur ton cou large et rond, sur tes épaules grasses,
Ta tête se pavane avec d'étranges grâces ;
D'un air placide et triomphant
Tu passes ton chemin, majestueuse enfant.

＊

「怪力者（エルキュウル）」原詩の「hercules」は音写は「エルキュレェ」で、ギリシャ神話のヘラクレスに基づく怪力無双の人を指す。ここは「précoces hercules」で「自信に満ち満ちた腕自慢の若者」の意。

原子朗編「大手拓次詩集」の異稿を以上の正字版を用いて手を加えて以下に示す。

＊

美しい船　ボードレール

わたしはおまへに話したい　おお　よわよわしい　たをやめよ
おまへの若さをかざる　さまざまの美しさを、
わたしはおまへをゑがいてみたい
おとなびてゆく　をさな姿の美しさを。

おまへが　ひろいもすそで　風をはらひながらゆくときは
沖へでてゆく　美しい船ともみえる、
亞麻布（リンネル）をつみ　ただよひながら
こころよい　またものうい　しづかな調（しらべ）につれて　うねりゆく。

おまへの　おほきいまるい頸（くび）のうへに　ふつくりとした肩のうへに
おまへのあたまは　ふしぎな媚（こび）をみせびらかす、
おだやかで　また　かちほこつたやうな風（ふう）をして
おまへは　みちをゆきすぎる　いかめしい子供よ。

わたしはおまへに話したい　おお　よわよわしい　たをやめよ
おまへの若さをかざる　さまざまの美しさを、
わたしはおまへをゑがいてみたい
おとなびてゆく　をさな姿の美しさを。

つきだして　波模様の絹をはりひろげる　おまへの胸は
揚揚(やうやう)としたおまへの胸は　うつくしい衣裳戸棚、
楯のやうにあざやかな　そのふくらんだ鏡板(かがみいた)は
かがやくひらめきを　とめてゐる。

ばらいろの星でよろうた　そそのかすやうな楯よ！
葡萄酒と　香料と　芳香酒(リクウル)と
美しいものにみちみち　心やあたまを狂はせる
あまい　祕密の衣裳戸棚よ！

おまへが　ひろいもすそで　風をはらいながらゆくときは
沖へでてゆく　美しい船ともみえる、
亞麻布(リンネル)をつみ　ただよひながら
こころよい　またものうい　しづかな調(しらべ)につれて　うねりゆく。

おひのける　もすそのしたに　みやびたおまへのふたつの脛(はぎ)は
ふかい甕(かめ)のなかで　くろい媚藥(ほれぐすり)を煉(ね)つてゐる
ふたりの魔術師のやうにも
えもわかぬ望みをくるしめ　そそりたてる。

早熟な怪力者(エルキユウル)をなぶるやうなおまへの腕は
かがやく蛇の　たくましい好敵手、
また　おまへの胸におしつけるやうに　戀人を
しふねくも　だきしめるのにふさはしい。

おまへの　おほきいまるい頸(くび)のうへに　ふつくりとした肩のうへに
おまへのあたまは　ふしぎな媚をみせびらかす、
おだやかで　また　かちほこつたやうな風(ふり)をして
おまへは　みちをゆきすぎる　いかめしい子供よ。

＊

「芳香（リクウル）」が「芳香酒（リクウル）」となっており、さらに第八連の一行目「おひのける　もすそのしたに　みやびたおまへのふたつの脛（はぎ）は」と二つ目の字空けがあること、最終連二行目「おまへのあたまは　ふしぎな媚をみせびらかす、」の末に、かく読点が打たれている点が違う。しかし、これは異稿というより、「詩集」版の組の杜撰さが疑われるようにも思われる。」

踊る蛇　ボードレール

わたしはどんなに見たいのか　ふしだらな戀人よ、
お前のうつくしいからだから
きらめく星のやうに
肌のひかりのながれるのを！

きついにほひの、
ふさふさとしたお前の髪のうへに、
青と茶色の波はもつれ
かんばしく　ただよふ海、

朝ふく風に
目覺(めざ)める船のやうに、
ゆめみる　わたしの魂は
とほい空へと　船出の用意する。

やさしさも　きびしさも
すこしもみせない　お前の眼は、
黃金(きん)と鐵とのとけあつた
つめたいふたつの寶石である。

氣儘な戀人よ、
お前が　足どりかろくゆくのをみれば、
鞭のさきに　へらへらと
をどる蛇かとおもはれる。

お前の　こどもあたまは
懶惰の重荷にたへかねて
象の子のやうに
なよらなよら　とゆれうごき、

お前のからだは　こごこんだり　のびたり、

ちやうど　あちらこちらにゆらめいて
みづのなかに帆架（ほげた）をひたす
しなやかな船のやう。

がうがうと　氷河のとけるにつれて
あふれてきた波のやうにも、
お前の唾（つば）のしたたりが
歯のふちにうかみでるとき、

にがいけれども　うつとりと
ボヘミアの酒をのむかのおもひがする
ああ　わたしのこころに
星をまきちらす　きれいな空よ！

［やぶちゃん注：「目覺（めざ）める」はママ。衍字か誤植かは不明。
「ジャンヌ・デュバル詩篇」の一つ。フランス語サイトのこちらから引く。朗読も聴ける。

＊

Le serpent qui danse　　Charles Baudelaire

Que j'aime voir, chère indolente,
　De ton corps si beau,
Comme une étoffe vacillante,
　Miroiter la peau !

Sur ta chevelure profonde
　Aux âcres parfums,
Mer odorante et vagabonde
　Aux flots bleus et bruns,

Comme un navire qui s'éveille
　Au vent du matin,
Mon âme rêveuse appareille

Pour un ciel lointain.

Tes yeux où rien ne se révèle
De doux ni d'amer,
Sont deux bijoux froids où se mêlent
L'or avec le fer.

A te voir marcher en cadence,
Belle d'abandon,
On dirait un serpent qui danse
Au bout d'un bâton.

Sous le fardeau de ta paresse
Ta tête d'enfant
Se balance avec la mollesse
D'un jeune éléphant,

Et ton corps se penche et s'allonge
Comme un fin vaisseau
Qui roule bord sur bord et plonge
Ses vergues dans l'eau.

Comme un flot grossi par la fonte
Des glaciers grondants,
Quand l'eau de ta bouche remonte
Au bord de tes dents,

Je crois boire un vin de bohême,
Amer et vainqueur,
Un ciel liquide qui parsème
D'étoiles mon cœur !

＊

原子朗「定本 大手拓次研究」（一九七八年牧神社刊）の一八八～一八九ページに拓次の訳出したボードレールの『悪の華』からの詩篇リストがあるが、それによれば、この「踊る蛇」には『同題異稿あり』とあり、原子朗編「大手拓次詩集」（一九九一年岩波文庫刊）の「翻

訳篇」に載る初期訳のものは、その異稿である。以下に以上の本篇を参考に恣意的に正字化し、一部に推定で歴史的仮名遣で読みを添えたものを示す。かなり有意に異なる。なお、後に再訳したものが以上の本篇だが、原氏の「大手拓次詩集」では、それも載っているのだが、最終連二行目の末尾が、「ボヘミアの酒をのむかのおもひがする、」と読点が打たれている点のみが異なる。これが正しい再訳稿であると思う。ただ、流石に読点だけの異同なので、全篇を再掲することはしない。

＊

踊る蛇　ボードレール

わたしが見るのを好む愛らしい怠惰者（なまけもの）、
お前のからだは左様に美しく、
ゆらめく星のやうにその皮がきらきらとする。

辛い匂ひを持つてゐる濃い髪の上に
海は青と褐色の波をもつて
かをりつつ又波浪する。

朝の風に覺（さ）める船のやうに
空想に沈むわたしの魂は
遠い空へと船出の用意する。

溫良も苦味もこればかりもあらはれないお前の眼は
黄金と鐵との交りゐる
冷たい二つの寶玉である。

歩調とりながら進むお前を見て
放逸の美しさ——
人は杖の端にをどる所の蛇とよぶだらう。

懶惰（らんだ）の重荷の下に
赤んぼのお前の頭は
年若い象の遊惰（いうだ）のやうにゆらゆらする。

お前のからだは美しい船のやうに
ちぢかまつたりまた長くのびたりする、

暗礁から暗礁とこぎまはり、水の中の帆桁（ほげた）をしづめてる。

つぶやく氷山の溶解によつて
波が大きくなるやうに、
お前の口の水が歯の縁にのつかるとき、

わたしは苦いうつとりとするボヘミアの酒を飲まうと思ふ、
私の心に星を撒きちらす液體の空よ。

＊

原氏は特異な読み以外は省略しておられるので（大手拓次は漢字には殆んどにルビを振っていると原氏は岩波文庫版で述べておられる）、「黄金」は「きん」とは読まず、「わうごん」と読んでいるものと推察する。個人的には、この異稿の方がよい。」

無　題　ボードレール

わたしは隣りの町を忘れなかつた、
われらの質素な家、　小さいけれど極く靜かな、
石膏のポモオヌと年とつたヴエナスとが
裸の四肢をかくしつつ、　小さな叢のなかに、
うらうらと流れる壯麗な太陽と夕暮よ、
それは、光りの束の碎かれたガラス板の向ふに、
物好きな空のなかに開いた大きい眼、
粗末なテーブル掛とセルの幕の上に
大蠟燭美しい反射をひろやかにとぼしながら
長いそして沈默な食事を考へさせるやうに思はれる

［やぶちゃん注：所持する堀口大學譯「惡の華　全譯」（昭和四二（一九六七）年新潮文庫刊の本篇（堀口氏の標題訳は「（僕はまだ忘れずにゐる）」である）の訳者註に、エルネスト・『ブラロンによれは一八四四年の作だといふ（作者二十四歳）』とあり、ボードレールは『父の死後』（フランス・ジョセフ・ボードレール。一八二七年二月、享年六十八。シャルルは七歳）、『母』（カロリーヌ・アルシンボール・デュフェイ。当時三十四）『が再婚するまでの短い期間を』（再婚は父の死の翌年）、『ボードレールは、彼女と一緒にヌイイ』（ヌイイ＝シュル＝セーヌ（Neuilly-sur-Seine）。パリ西部近郊にあるコミューン。パリ中心から西北六・八キロメートルの距離にある都市。ここ。グーグル・マップ・データ）『で暮らしたが、この詩はその當時の幼年の日の思ひ出を歌ったものだといふ』とある。以下、原詩を見られれば判る通り、「無題」という題ではなく、題がないのである。「ポモオヌ」「Pomone」。音写は「ポォーモンヌ」が近いか。ローマ神話の果実とその栽培を司る女神ポーモーナ。「poma」は「果物」の意。「ヴエナス」「Vénus」。言わずと知れた、ヴィーナス。フランス語では「ヴェニュゥス」が近い。ローマ神話で愛と美の女神とされるが、元来、彼女は菜園を司る女神であった。因みに、性別記号の「♀」は本来は彼女を意味するものであった。「セル」「cierge」。フランス語は「シャルゥジュ」。阿蘭陀語の「セルジ」を「セル地」と誤解し、その「地」を略した語。梳毛糸（そもう）を、平織又は綾織や斜子織（なこ）（経緯（たてよこ））ともに二本以上の糸を引き揃えにして織ったもので、平織を縦・横に拡大した組織りを指す）にした薄地

の毛織物。綿・絹を用いた交織(こうしょく)もある。

原詩をフランス語版「Wikisource」の「*Les Fleurs du mal*」（各篇単独）のこちらページから引く。

＊

Je n'ai pas oublié, voisine de la ville,
Notre blanche maison, petite mais tranquille,
Sa Pomone de plâtre et sa vieille Vénus
Dans un bosquet chétif cachant leurs membres nus ;
— Et le soleil, le soir, ruisselant et superbe,
Qui, derrière la vitre où se brisait sa gerbe,

Semblait, grand œil ouvert dans le ciel curieux,
Contempler nos dîners longs et silencieux,
Et versait largement ses beaux reflets de cierge
Sur la nappe frugale et les rideaux de serge.

＊

幼年懐古詩篇であるため、後の曲が作られ、例えば、こちらで男性歌手のものを聴くことが出来る。」

病める詩神　ボードレール

噫　あはれな詩神よ！
今朝(けさ)お前はどうしたのか？
お前の深いまなこに幻の夜の歌が群れ、
そして私は、　かはるがはりお前の顔に顯れる
冷やかなは沈默の、　惑亂と恐懼とを見る。

綠の惡魔とばらいろの妖鬼、
彼等は自分の甕(かめ)の恐怖と愛戀とをお前に注いだ、
夢魔は、　暴虐と執拗の拳をもつて
奇しきマンテユールスの底にお前を沈めた。

私は健康の匂を放ちながら
強い思索のお前の胸と常に往(ゆ)き交(か)うて
キリスト教のお前の血潮を
調べよき彼に流せよ

古い調べの豊かな響きのやうに、
歌の父フヱービユスの收穫の大神パンとが
かはるがはるしろしめしたまふのだ。

［やぶちゃん注：まず、原詩をフランス語サイトのこちらから引いて示す。

＊

La muse malade　　Charles Baudelaire

Ma pauvre muse, hélas ! qu'as-tu donc ce matin ?
Tes yeux creux sont peuplés de visions nocturnes,
Et je vois tour à tour réfléchis sur ton teint
La folie et l'horreur, froides et taciturnes.

Le succube verdâtre et le rose lutin

T'ont-ils versé la peur et l'amour de leurs urnes ?
Le cauchemar, d'un poing despotique et mutin,
T'a-t-il noyée au fond d'un fabuleux Minturnes ?

Je voudrais qu'exhalant l'odeur de la santé
Ton sein de pensers forts fût toujours fréquenté,
Et que ton sang chrétien coulât à flots rythmiques,

Comme les sons nombreux des syllabes antiques,
Où règnent tour à tour le père des chansons,
Phoebus, et le grand Pan, le seigneur des moissons.

＊

壺齋散人引地博信氏のサイト「フランス文学と詩の世界」の本詩篇のページ「病気のミューズ（ボードレール：悪の華）」によれば、壺齋散人氏の訳の後に、

《引用開始》

「病気のミューズ」は特定の女性をイメージして書いたのではなく、時代精神の堕落と、その開放への願いを歌ったものである。「悪の華」の初版のためにかいたものと思われる。

Le succube は、女の形をとって男たちを誘惑する悪魔の手先。また、Minturnes は、ローマ時代の都市の名で、周囲を沼地に囲まれていた。そこにマリウスが逃げ込んで、ローマの迫害を逃れたとされる。ボードレールはこれらのイメージを借りて、現代社会が悪意によって蝕まれているさまを匂わせている。

最後の６節は、現代社会の解放を願った部分だ。ボードレールはその解放の導き手として、歌の神フェビュスと収穫の神パーンを上げている。調和と豊穣の神々である。

《引用終了》

「succube」は音写「シュキュベ」で、所謂「スクブス」「サッキュバス」（英語：Succubus）とで、壺齋散人氏の言われる通り、女性の姿をとって人を惑わす夢魔を指す。対語である男性の姿のそれは、「incube」（音写「オンキュベ」）で「インキュバス」（Incubus）である（総てラテン語由来）。

「Minturnes」の音写は「ミントゥルナエ」。

「マリウス」は共和政ローマ末期の軍人・政治家ガイウス・マリウス（ラテン語: Gaius Marius 紀元前一五七年～紀元前八六年）のこと。彼については、当該日本語のウィキを参照されたいが、この事件については、フランス語ウィキの「*Marius prisonnier à Minturnes*」（「ミントゥルナエの囚人マリウス」の歴史画）を見られたい。

「Phoebus」の音写は「フェビュス」。ギリシアの光の男神で、予言・詩歌・音楽及び治癒を司る神。ゼウスとレートーの息子。
「Pan」「パーン」。言わずと知れたギリシア神話の牧羊神パーン。造形とキリスト教の認識から先に示した「インキュバス」と通性が強い。」

高　翔　ボードレール

池よりも高く、　谿よりも高く、
山よりも、　林よりも、　雲よりも、　海よりも、
太陽の彼方に、　エーテルの彼方に、
まきちらされた星の世界の境界の彼方に、

わたしの精靈よ、　お前は敏捷にうごく、
そして、　波のなかに眩惑する好い泳ぎ手のやうに
お前は、　いひつくせない又男らしい佚樂をもつて
快活に奥深い無限に畦（うね）を作つてゐる。
この病鬱の瘴氣から遠くとび去れ、
上層の大氣のなかにお前を清めに行け、
そして、　芳醇な神酒のやうな
清澄な空間を滿たすところの煌く火も飲め
倦怠と、　霧に朦朧とした現実の重荷を擔うてゐる大きい憂愁とを越えて
力強い翼をもつて、　明かな靜かな靜かな野の方に
天翔けることの出來る者は幸福である。

その思想が雲雀のやうに、　明け方の空の彼方へ
自由に飛揚しうるものは、
また生命の上を翔けり、　努力無くして花の言葉と
沈默の言葉とを理解する者は幸福である。

［やぶちゃん注：今回はフランス語ウィキの本篇の単独ページのそれを引いて示す。

＊

Élévation　　Charles Baudelaire

Au-dessus des étangs, au-dessus des vallées,
Des montagnes, des bois, des nuages, des mers,

Par delà le soleil, par delà les éthers,
Par delà les confins des sphères étoilées ;

Mon esprit, tu te meus avec agilité,
Et, comme un bon nageur qui se pâme dans l'onde,
Tu sillonnes gaiement l'immensité profonde
Avec une indicible et mâle volupté.

Envole-toi bien loin de ces miasmes morbides,
Va te purifier dans l'air supérieur,
Et bois, comme une pure et divine liqueur,
Le feu clair qui remplit les espaces limpides.

Derrière les ennuis et les vastes chagrins
Qui chargent de leur poids l'existence brumeuse,
Heureux celui qui peut d'une aile vigoureuse
S'élancer vers les champs lumineux et sereins ;

Celui dont les pensers, comme des alouettes,
Vers les cieux le matin prennent un libre essor,
– Qui plane sur la vie, et comprend sans effort
Le langage des fleurs et des choses muettes !

＊

ここまでくると、拓次の訳詩の連分けはやはり確信犯であることが明瞭となる。底本の本篇はここであるが、「この病鬱の瘴氣から遠くとび去れ、」と「上層の大氣のなかにお前を清めに行け、」の間は見開き改ページであるものの、物理的な版組みに於いては、一行空けは存在しない。**ここで行空けを仮想したとしても、原詩と比較すれば、それでもまだ一連足りないのである。しかも、この改ページ部分は、寧ろ、続けて読まれるように訳されていると考えた方が、自然であることが判る。私はこの訳が甚だ好きである。**

「エーテル」「éthers」。これは「ether」複数形で「光素」などと訳されるところの、古代ギリシア時代から二十世紀初頭までの間、実に永く想定され続けた、全世界・全宇宙を満たす一種の物質の名称である。古代ギリシャの哲学者アリストテレスは、地・水・火・風に加えて、「エーテル」(「輝く空気の上層」を表わす言葉)を第五の元素とし、天体の構成要素とした。近代では、全宇宙を満たす希薄な物質とされ、ニュートン力学では「エーテル」に対し、「静止する絶対空間」の存在が前提とされた。また、光や電磁波の媒質とも

考えられた。しかし、十九世紀末に「マイケルソン＝モーリーの実験」で、「エーテル」に対する地球の運動は見出されず、この結果から、「ローレンツ収縮」の仮説を経、遂に一九〇五年、アインシュタインが「特殊相対性理論」を提唱し、「エーテル」の存在は否定された（ここまでは「ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典」に拠った）。但し、現在でも擬似科学や一部の新興宗教の中に「エーテルの亡霊」が巣食って蠢いている。堀口大學などは、『虚空（こくう）の際涯（はてし）』などと訳しているが、ここは断然、「エーテルの彼方に」がいい。

「瘴氣」「miasmes」。音写「ミィアスマ」。通常、このように複数形で、「腐敗物などから発生する有毒なガス＝瘴気（しょうき）」を言う。」

［やぶちゃん注：**第二連の三行目の頭の「櫂」（かい）は底本では「擢」となっているが、これは誤字或いは誤植であることは間違いなく、「擢」では躓くだけなので、特異的に原子朗編「大手拓次詩集」で修正した。同じ連の終行末には句読点がないが、これも同書で句点を打って修正した。**

本篇を以って本詩集のボードレールの訳詩は終わっている。］

信　天　翁　ボードレール

乘組の人人は、ときどきの慰みに、
海のおほきな鳥である信天翁（あほうどり）をとりこにする、
その鳥は、航海の怠惰な友として、
さびしい深みの上をすべる船について來る。

板（いた）のうへに彼等がそれを置くやいなや
この扱ひにくい、内氣な青空の主（ぬし）は、
櫂のやうに、その白い大きな羽をすぼめて、
あはれげにしなだれる。

この翼ある旅人は、なんと固くるしく、弱いのだらう！
彼は、をかしく醜いけれど、なほうつくしいのだ！
ある者は、短い瀬戸煙管（きせる）で其嘴をからかひ、
他の者は、びつこをひきながら、とぶこの廢疾者（かたはもの）の身ぶりをまねる！

詩人は、嵐と交り、射手をあざける
雲の皇子（プランス）によく似てゐるが、
下界に追はれ、喚聲を浴びては大きな彼の翼は邪魔になるばかりだ。

［やぶちゃん注：今回はフランス語のウィキの単独の当該詩篇ページにあるものを引いて示す。

＊

L'Albatros　　Charles Baudelaire.

Souvent, pour s'amuser, les hommes d'équipage
Prennent des albatros, vastes oiseaux des mers,
Qui suivent, indolents compagnons de voyage,
Le navire glissant sur les gouffres amers.

À peine les ont-ils déposés sur les planches,
Que ces rois de l'azur, maladroits et honteux,
Laissent piteusement leurs grandes ailes blanches
Comme des avirons traîner à côté d'eux.

Ce voyageur ailé, comme il est gauche et veule !
Lui, naguère si beau, qu'il est comique et laid !
L'un agace son bec avec un brûle-gueule,
L'autre mime, en boitant, l'infirme qui volait !

Le Poète est semblable au prince des nuées
Qui hante la tempête et se rit de l'archer ;
Exilé sur le sol au milieu des huées,
Ses ailes de géant l'empêchent de marcher.

*

「信天翁」ミズナギドリ目アホウドリ科アホウドリ属アホウドリ *Phoebastria albatrus*。博物誌は私の「和漢三才圖會巻第四十四　山禽類　鶖（みさご）　（ミサゴ／〔附録〕信天翁（アホウドリ））」を参照されたい。なお、当該ウィキによれば、「阿呆鳥」という和名は、人間が接近しても地表での動きが緩慢で、捕殺が容易だったことに由来する」。『日本付近にはアホウドリ類が』三『種（本種のほか、コアホウドリ』（*Phoebastria immutabilis*）『クロアシアホウドリ』（*Phoebastria nigripes*）『）が生息するが、古くはそれらを区別せず、京都北部沿岸地方や沖縄で「あほうどり」、伊豆諸島の八丈島や小笠原諸島では「ばかどり（馬鹿鳥）」などと呼んだ』。『その他の地方名として、「沖にすむ美しい鳥・立派な鳥」の意味合いのある「おきのたゆう（沖の大夫）」「おきのじょう（沖の尉）」（山口県日本海沿岸部）』、『クジラとともにやって来ることから「らい」「らいのとり」（九州北部沿岸地方）があり』、『そのほか』、『「とうくろう」（高知県）』『などがある。また、八丈島や小笠原諸島では、本種を「しろぶ」あるいは「しらぶ」、クロアシアホウドリを「くろぶ」と呼び分ける用法もあった』。『アホウドリという名称は蔑称であるとして、山口県の日本海

沿岸部で古くから呼ばれているオキノタユウ（沖の太夫、沖にすむ大きくて美しい鳥）に改名しようとする動きもある』とあり、また、『漢字表記として「信天翁」があり、音読みにして「しんてんおう」とも呼ばれる。「信天翁」という言葉については、他の鳥が取り落とした魚が天から降ってくるのを待つ鳥と考えられていたことから来た名前である（明代の『「丹鉛総録」』に記述があるが、この「信天翁」という鳥は中国内陸部の雲南省に住むとされ、本種を指すかは疑わしい）』。『なお、尖閣諸島の久場島にはこの名にちなんだ「信天山」という山がある。このほか日本では漢語的表現として「海鵜」（かいが）などが使われたことがある』。『英語名称は Short-tailed albatross が一般的に用いられるが、アホウドリ類のほかの種に比べて特別に尾が短いわけではない』とする。また、『ドイツの哲学者にして詩人のフリードリヒ・ニーチェ』（一八四四年～一九〇〇年：ボードレールより二十三年下）は『「あほう鳥」と題する詩において、空高く、漂うように飛んでいるあほう鳥に向かって「ぼくもまた永遠の衝動によって高処をめざす」（円子修平訳）と詠っている』とある。」

秋

サマン

うづまく風は扉をたふし、
そのしたに森は髪のやうに身をもだえる。
かちあふ木々の幹は砂(いさご)の輾轉する海のひびきのやうに、
はげしい風鳴
りをたかめてゐる。

おぼろな丘(をか)におりてくる秋は、
重い歩みのうちにわたし達の心をふるへさせる。
そしてどんなにいたはしく萎れた薔薇のめめしい失望を、
かなしんでやるかをごらんなさい。

休みなくぶんぶんいつた黄金色の蜂の翔けりも沈默した。
閂は錆のついた門格子にきりきりとなる。
あを蔦(つた)の棚はふるへ、地はしめつてきた。
そして白いリンネルは圍(かこ)ひ地のなかに、うろたへてかさかさとする。

さびれた庭は微笑する、
死がくるときに、ながながとお前に別れをいふやさしい顔のやうに。
ただ鐵砧(かなしき)のおとか、それとも、犬のなきごゑか、
うつたうしくしめきつた窓ガラスにやつてくる。

母子草と黄楊(つげ)の樹の瞑想をさましつつ、
鐘はひくいねに檀家の人の心になりいでる、
また光りは苦悶のはてしない身ぶるひをして、
空のふかみに、ながいながい夜のくるのをきいてゐる。

このものあはれな長夜(ながよ)も明日(あす)になつたらかはるだらう、
すがすがしい朝とひややかな又うつけな朝と、
たくさんの白い蝶は葉牡丹(はぼたん)のなかにひらめきながら、
また物音はこころよい微風の中にさはやかになりながら。

それはさておき、　この家はお前のことを嘆きもしないで、
その木蔦と燕の巣とでお前をもてなしてくれる、
そして自分のわきに放蕩者のかへるのを待ちうけて、
ながい藍色の屋根の波にけむりをのぼらせる。

命（いのち）がやぶれ、　ながれいで、　もえあがるとき、
うき世のつよい酒にゑひしれて、
血の盃（さかづき）のうへにおもい髪の毛がたれかかれば、
よごれた魂はちやうど遊女のやうである。

けれども、　鴉は空のなかに數しれずむらがる、
そしてもはや、　さわがしい狂氣をすてて、
その魂は、旅人が歸り旅のみちすがら、
なじみの調度にめぐりあふたのしい嘆息をおしのける。

夏の花びらは花梗のうへに黒くしをれてゐる。
おまへの室にまたはひり、　おまへのマントを釘にかける。
水のなかの薔薇のやうなお前のゆめは、
仲のよいランプのあまい太陽にひらいてくる。

思ひにしづんでゐる時計では、
知らせの鈴（りん）がひそかに沈默の心をうつ、
窓ぎはの孤獨はその氣づかひをひろめてゆき、
かがみながら姉のやうにおまへの額に接物する。
これは申分のない隱（かく）れ家（が）だ、　これは氣持のよい住居（すまひ）だ。
あつたかい壁の密室、　ひまもない竈（かまど）、
そこで極めて稀なる越栗幾失兒（エリキシル）のやうに、
内心の生命（いのち）のうつくしい本質をつくりあげる。

そこに、　お前は假面と重荷とをとりのけることが出來る。
騷擾からはなれて、　いな虛飾から遠くのがれて、
いとしいものの匂ひを、　カーテンの襞（ひだ）のなかにあらはになつてゐる。
おまへの胸にばかりただよはせるために。

このときこそ、　心おきなく仕事にいそしんでまことの神を禮拜し、
神々しい身ぶるひがお前の年若さと淸らかさとを、

はればれとあらはすやうになつてくる。
秋はこのためにたぐひないよい季節である。

すべてのものはしづかに、　風は廊下の奥にすすりなき、
お前の精神はおろかなる鎖をたちきつた。
そしてうごかない時の水のうへに裸のままうなだれて、
そのふさはしい鏡のきれいな水晶に自分の姿をうつす。

それは消えかかつた火のわきの裸の女神（めがみ）である、
あたらしい空氣のなかに船出（ふなで）するぼんやりとした大きな船である、
肉感的な、　また物思はしい接吻のするどい液（しる）と、
人に知られない水のうへの日沒である……

［やぶちゃん注：アルベール・ヴィクトル・サマン（Albert Victor Samain　一八五八年～一九〇〇年）は〈秋と黄昏（たそがれ）の詩人〉と称えられたフランス象徴派の詩人。リール生まれ。パリに出て、文芸雑誌『メルキュール・ド・フランス』（*Mercure de France*）創刊に協力した。代表作に象徴派風の第一詩集「王女の庭で」（*Au Jardin de l'Infante* ：一八九三年）、高踏派風の第二詩集「壺の肌に」（*Au flanc du vase*：一八九八年）がある。ボードレールから強い影響を受け、ヴェルレーヌの詩にも感化された、やや病的なエレジーを得意とした。
「おまへの室にまたはひり、　おまへのマントを釘にかける。」の一行中、「はひり」の後には読点らしきものがない（左手に微かな汚損はある）が、前後に徴して、読点を打った。「閂」は「かんぬき」と読む。
　以下にフランス語サイトのこちらにある原詩を引いて示す。それのよれば、一八九四年十月、パリ南西近郊のイヴリーヌ県にあるマニー＝レ＝ザモー（Magny-les-Hameaux：グーグル・マップ・データ）での作。

＊

Automne　　Albert Samain

Le vent tourbillonnant, qui rabat les volets,
Là-bas tord la forêt comme une chevelure.
Des troncs entrechoqués monte un puissant murmure
Pareil au bruit des mers, rouleuses de galets.

L'Automne qui descend les collines voilées
Fait, sous ses pas profonds, tressaillir notre coeur ;
Et voici que s'afflige avec plus de ferveur
Le tendre désespoir des roses envolées.

Le vol des guêpes d'or qui vibrait sans repos
S'est tu ; le pêne grince à la grille rouillée ;
La tonnelle grelotte et la terre est mouillée,
Et le linge blanc claque, éperdu, dans l'enclos.

Le jardin nu sourit comme une face aimée
Qui vous dit longuement adieu, quand la mort vient ;
Seul, le son d'une enclume ou l'aboiement d'un chien
Monte, mélancolique, à la vitre fermée.

Suscitant des pensers d'immortelle et de buis,
La cloche sonne, grave, au coeur de la paroisse ;
Et la lumière, avec un long frisson d'angoisse,
Ecoute au fond du ciel venir des longues nuits…

Les longues nuits demain remplaceront, lugubres,
Les limpides matins, les matins frais et fous,
Pleins de papillons blancs chavirant dans les choux
Et de voix sonnant clair dans les brises salubres.

Qu'importe, la maison, sans se plaindre de toi,
T'accueille avec son lierre et ses nids d'hirondelle,
Et, fêtant le retour du prodigue près d'elle,
Fait sortir la fumée à longs flots bleus du toit.

Lorsque la vie éclate et ruisselle et flamboie,
Ivre du vin trop fort de la terre, et laissant
Pendre ses cheveux lourds sur la coupe du sang,
L'âme impure est pareille à la fille de joie.

Mais les corbeaux au ciel s'assemblent par milliers,

Et déjà, reniant sa folie orageuse,
L'âme pousse un soupir joyeux de voyageuse
Qui retrouve, en rentrant, ses meubles familiers.

L'étendard de l'été pend noirci sur sa hampe.
Remonte dans ta chambre, accroche ton manteau ;
Et que ton rêve, ainsi qu'une rose dans l'eau,
S'entr'ouvre au doux soleil intime de la lampe.

Dans l'horloge pensive, au timbre avertisseur,
Mystérieusement bat le coeur du Silence.
La Solitude au seuil étend sa vigilance,
Et baise, en se penchant, ton front comme une soeur.

C'est le refuge élu, c'est la bonne demeure,
La cellule aux murs chauds, l'âtre au subtil loisir,
Où s'élabore, ainsi qu'un très rare élixir,
L'essence fine de la vie intérieure.

Là, tu peux déposer le masque et les fardeaux,
Loin de la foule et libre, enfin, des simagrées,
Afin que le parfum des choses préférées
Flotte, seul, pour ton coeur dans les plis des rideaux.

C'est la bonne saison, entre toutes féconde,
D'adorer tes vrais dieux, sans honte, à ta façon,
Et de descendre en toi jusqu'au divin frisson
De te découvrir jeune et vierge comme un monde !

Tout est calme ; le vent pleure au fond du couloir ;
Ton esprit a rompu ses chaînes imbéciles,
Et, nu, penché sur l'eau des heures immobiles,
Se mire au pur cristal de son propre miroir :

Et, près du feu qui meurt, ce sont des Grâces nues,
Des départs de vaisseaux haut voilés dans l'air vif,

L'âpre suc d'un baiser sensuel et pensif,
Et des soleils couchants sur des eaux inconnues…

＊

「母子草」**原詩の「immortelle」の訳だが、誤り。そもそもキク目キク科キク亜科ハハコグサ連ハハコグサ属ハハコグサ *Gnaphalium affine*（「ホウコグサ・ホオコグサ」の異名でも知られる）は、日本以外では中国・インドシナ・マレーシア・インドに分布する（本邦では全国的に見られるが、古代に中国か朝鮮から帰化したものと考えられている）が、フランスには自生しないから、まず、サマンはハハコグサ自体を知らない、見たことがないと考えてよいし、だいたいからして季節が合わない（「春の七草」の一つで、本邦では知らぬ人もあるまいが、学名画像検索をリンクさせておく）。**或いは、拓次の持つ辞典にそう誤解させるいい加減な記載があったのかも知れぬが、私の所持する辞書では、**固有名詞では『麦藁菊（むぎわらぎく）』**とする（因みにこの単語は一般名詞で「不滅の存在」「神」の意がある）。これは、**キク目キク科ムギワラギク属ムギワラギク *Helichrysum bracteatum*** であり、オーストラリア原産（以下も合わせてフランス語の当該ウィキに拠る）で、一八五〇年代にドイツで換喩植物として繁殖が行われ、多様な品種が生み出された。学名画像検索を示しておく**が、比較するべくもなく、ハハコグサとは、赤の他人で似たところは微塵もないから、これは、やはりトンデモ語訳とするしかない。**

「越栗幾失兒（エリキシル）」「élixir」。音写は「エリィキスィール」。本来は「植物等から抽出精製した「精分」であるが、ここでは「霊薬・秘薬」の意。

なお、例の原子朗編「大手拓次詩集」では、原詩に則り、十連目が二つに分離されている。以上の正規表現版を用いて、それを再現しておく。

＊

秋　サマン

うづまく風は扉をたふし、
そのしたに森は髪のやうに身をもだえる。
かちあふ木々の幹は砂（いさご）の輾轉する海のひびきのやうに、
はげしい風鳴りをたかめてゐる。

おぼろな丘（をか）におりてくる秋は、
重い歩みのうちにわたし達の心をふるへさせる。
そしてどんなにいたはしく萎れた薔薇のめめしい失望を、
かなしんでやるかをごらんなさい。

休みなくぶんぶんいつた黄金色の蜂の翔けりも沈默した。
閂は錆のついた門格子にきりきりとなる。
あを蔦（つた）の棚はふるへ、地はしめつてきた。
そして白いリンネルは圍（かこ）ひ地のなかに、　うろたへてかさかさとする。

さびれた庭は微笑する、
死がくるときに、　ながながとお前に別れをいふやさしい顏のやうに。
ただ鐵砧（かなしき）のおとか、　それとも、　犬のなきごゑか、
うつたうしくしめきつた窓ガラスにやつてくる。

母子草と黄楊（つげ）の樹の瞑想をさましつつ、
鐘はひくいねに檀家の人の心になりいでる、
また光りは苦悶のはてしない身ぶるひをして、
空のふかみに、ながいながい夜のくるのをきいてゐる。

このものあはれな長夜（ながよ）も明日（あす）になつたらかはるだらう、
すがすがしい朝とひややかな又うつけな朝と、
たくさんの白い蝶は葉牡丹（はぼたん）のなかにひらめきながら、
また物音はこころよい微風の中にさはやかになりながら。

それはさておき、　この家はお前のことを嘆きもしないで、
その木蔦と燕の巢とでお前をもてなしてくれる、
そして自分のわきに放蕩者のかへるのを待ちうけて、
ながい藍色の屋根の波にけむりをのぼらせる。

命（いのち）がやぶれ、ながれいで、もえあがるとき、
うき世のつよい酒にゑひしれて、
血の盃（さかづき）のうへにおもい髪の毛がたれかかれば、
よごれた魂はちやうど遊女のやうである。

けれども、　鴉は空のなかに數しれずむらがる、
そしてもはや、　さわがしい狂氣をすてて、
その魂は、旅人が歸り旅のみちすがら、
なじみの調度にめぐりあふたのしい嘆息をおしのける。

夏の花びらは花梗のうへに黑くしをれてゐる。

おまへの室にまたはひり　おまへのマントを釘にかける。
水のなかの薔薇のやうなお前のゆめは、
仲のよいランプのあまい太陽にひらいてくる。

思ひにしづんでゐる時計では、
知らせの鈴（りん）がひそかに沈默の心をうつ、
窓ぎはの孤獨はその氣づかひをひろめてゆき、
かがみながら姉のやうにおまへの額に接物する。

これは申分のない隱（かく）れ家（が）だ、これは氣持のよい住居（すまゐ）だ。
あつたかい壁の密室、ひまもない竈（かまど）、
そこで極めて稀なる越栗幾失兒（エリキシル）のやうに、
内心の生命（いのち）のうつくしい本質をつくりあげる。

そこに、　お前は假面と重荷とをとりのけることが出來る。
騷擾（さうぜう）からはなれて、　いな虛飾から遠くのがれて、
いとしいものの匂ひを、　カーテンの襞（ひだ）のなかにあらはになつてゐる。
おまへの胸にばかりただよはせるために。

このときこそ、　心おきなく仕事にいそしんでまことの神を禮拜し、
神神しい身ぶるひがお前の年若さと清らかさとを、
はればれとあらはすやうになつてくる。
秋はこのためにたぐひないよい季節である。

すべてのものはしづかに、　風は廊下の奥にすすりなき、
お前の精神はおろかなる鎖をたちきつた。
そしてうごかない時の水のうへに裸のままうなだれて、
そのふさはしい鏡のきれいな水晶に自分の姿をうつす。

それは消えかかつた火のわきの裸の女神（めがみ）である、
あたらしい空氣のなかに船出（ふなで）するぼんやりとした大きな船である、
肉感的な、また物思はしい接吻のするどい液（しる）と、
人に知られない水のうへの日沒である……

＊」

［やぶちゃん注：以下、「🦋」は、もっと白抜きのシンプルなものである。同じものがないので、ワードで使用可能なこれに代えた。］

STANCES　モレアス

わたしの愛してゐる薔薇は日毎に葉がおちる
季節がきても、　あたらしいとび色の芽は見えない
そよ風はいつまでもいつまでもふいてゐたのだけれど。
これはね、　あの流れをさへもこほらせる
無慈悲な北風のしわざだよ。

よろこびよ、なぜお前はさうこゑをおほきくしたいのか
また憂鬱にひたつてゐる絃（いと）を
わたしの指のしたにさそうて、　わけもなくお前がくるときに
それはたいへんないたづらだといふことを、　おまへはちつとも知らないのか

🦋

墓場のわきをゆくやうにかなしみながら
　谷のうつろのなかをとほつていつたとき
おちてくる木の葉のために黄金色（こがねいろ）にかざられた
　あのいたましい北風よ
北風はなにを話しかけたのか
　美しい果物や花をゆすぶつてゐる小枝に
十一月の太陽に、　おそ咲きのあけぼのに
　わたしのたましひに、　わたしのこころに。

🦋

わたしはあらしの風とともに野原のなかをあるいた
あをじろい朝にひくい雲のしたに。
いううつの鴉はわたしの旅をみおくり
らひさな水たまりのなかには、　わたしの足おとがひびけた。

むかうのはてに電（いなづま）はそのほのほをはしらせ
さうして北風はそのながい嘆息をつのらせた
けれどもあらしは、　わたしの魂にはあんまりよわすぎた
たましひはその鼓動をもつて雷鳴（かみなり）を消してしまふから。

秦皮（とねりこ）の黄金色（こがねいろ）の剝皮（むけかは）と楓とで
秋はそのかがやく獲物をつくつた
鴉はつねにむじやうなる翔（かけ）りをつづけて
わたしの運命にかげをなげながらわたしのあとについてきた。

［やぶちゃん注：ジャン・モレアス（Jean Moréas　一八五六年～一九一〇年）はギリシャのアテネ生まれの象徴主義の詩人。当該ウィキによれば、『今日よく知られているのは通称であり、本名はヨアニス・A・パパディアマンドープロス』『という。フランス語で作品を書き、パリ』『を活動の拠点とした。サン＝マンデ（フランスのイル＝ド＝フランス地域圏に当たるヴァル・ド・マルヌ県）で』亡くなったとあり、一八八六年九月十八日附の日刊新聞『フィガロ』（*Le Figaro*）に「象徴主義宣言」（*Le Symbolisme*）を『掲載し、実質的に象徴主義を定義・提唱した人物である』ともあった。フランス語の彼のウィキの方が遙かに詳しい。

「ひびけた」はママ。「響けた」で「響きた」「響いた」。

以上の詩は、ワン・セットのものではなく、モレアスが一八九九年から一九〇五年に一度、纏められて刊行された詩集「スタンース」（*Stances*：フランス語で「同型の詩節から成る悲劇的叙情詩」を指す）の中から恣意的に大手拓次が選んだものと思われる。原詩集はフランス語の「Wikisource」にあるが、私の乏しいフランス語力では、各詩篇を具体的に同定して指摘する力はないので、原詩は示せない（少し試みたが、百％これだと断定出来る詩句を見出せないように感じたので、やめた）。**ただ、この詩集、フランス語の彼のウィキでは、一八九九年から一九〇一年に書かれ、死後の一九二〇年に完全版が出ている。しかも、所持する原子朗氏の一九七八年牧神社刊の「定本 大手拓次研究」に載る大手拓次が所蔵していた「フランス語蔵書目録」では、二四三ページに『Jean MORÉAS：L'Stances (Mercure de France,1920)』とあるので、その最終版でないと原詩は載っていない可能性も高いようにも思われる。**悪しからず。

なお、**原子朗氏の岩波文庫「大手拓次詩集」（一九九一年刊）では、読点・改行違い・行空け・読み（ルビ）等の表記が異なる箇所が有意にあるので、以上の正字化の本文を用いつつ、そちらの異同を含むそれを以下に示しておく。読点の後の字空けはナシにした。蝶々マークはないので、そちらの「＊」に代えた。**

＊

STANCES　モレアス

わたしの愛してゐる薔薇は日毎に葉がおちる、
季節がきても、あたらしいとび色の芽は見えない、
そよ風はいつまでもいつまでもふいてゐたのだけれど。
これはね、あの流れをさへもこほらせる無慈悲な北風のしわざだよ。

よろこびよ、なぜお前はさうこゑをおほきくしたいのか、
また憂鬱にひたつてゐる絃(いと)を
わたしの指のしたにさそうて、わけもなくお前がくるときに、
それはたいへんないたづらだといふことを、おまへはちつとも知らないのか。

＊

墓場のわきをゆくやうにかなしみながら
　谷のうつろのなかをとほつていつたとき
おちてくる木の葉のために黄金色(こがねいろ)にかざられた
　あのいたましい北風よ

北風はなにを話しかけたのか
　美しい果物や花をゆすぶつてゐる小枝に
十一月の太陽に、おそ咲きのあけぼのに
　わたしのたましひに、わたしのこころに。

＊

わたしはあらしの風とともに野原のなかをあるいた
あをじろい朝にひくい雲のしたに。
いううつの鴉(からす)はわたしの旅をみおくり
らひさな水たまりのなかには、わたしの足おとがひびけた。

むかうのはてに電(いなづま)はそのほのほをはしらせ
さうして北風はそのながい嘆息をつのらせた
けれどもあらしは、わたしの魂にはあんまりよわすぎた

たましひはその鼓動をもつて雷鳴（かみなり）を消してしまふから。

秦皮（とねりこ）の黄金色（こがねいろ）の剝皮（むけかは）と楓（かへで）とで
秋はそのかがやく獲物をつくつた
鴉はつねにむじやうなる翔（かけ）りをつづけて
わたしの運命にかげをなげながらわたしのあとについてきた。

＊」

螢

タゴオル

わが空想はほたるなり
闇にまばたく
うるはしき光の點點

みちのべのすみれのこゑは
心なきながしめをいざなはず
まばらにありて　つぶやけるのみ

ほのぐらきうつらうつらの心のひまに
夢こそは　その巢をつくれ
日の旅人のおとしゆきにしかけらもて

春は枝々に花びらをまきちらす
すゑの果(み)をむすぶにあらで
ひとときの移り氣に咲く花びらを

地のまどろみの手よりのがれたる悦びは
あまたたび　木の葉のなかに驅(か)けり入り
ひもすがら　空のかなたにをどるなり
かりそめの　わがことのはも
としつきの波のうへにぞ　かろやかにをどるなり
おもかりしわが難行(なんぎやう)の
いや果(は)つるとき

こころの底のかげろふは
うすきつばさの生(お)ふるがに
はや　わかれわかれに舞ひゆけり
しづかなる　ゆふべのそらへ

胡蝶は月を教へず
瞬間(またたき)の數をかぞへて
生(い)くる時ゆたかなり

［やぶちゃん注：「詩聖」と称されたラビンドラナート・タゴール（ベンガル語／ロビンドロナート・タクゥル　ヒンディー語／ラビーンドラナート・タークゥル　英語／Rabindranath Tagore　一八六一年～一九四一年）はインドの詩人・思想家。一九一三年にはその詩集「ギタンジャリ」によってノーベル文学賞を受賞した（アジア人で初のノーベル賞受賞者）。詳しくは参照した当該ウィキを見られたい。本詩篇の原詩は、一九二八年に本人が自ら英訳して出版した詩集「蛍」（*Fireflies*：ニュー・ヨークのマックミラン社刊）の冒頭部である。「Internet archive」のこちらで英訳原本が視認出来る。英文原詩の相当箇所は以下である。そこでの**本文はここから、ここまでの八連**である。

＊

Fireflies　　Rabindranath Tagore

My fancies are fireflies,—
Specks of living light
twinkling in the dark.

The voice of wayside pansies,
that do not attract the careless glance,
murmurs in these desultory lines.

In the drowsy dark caves of the mind
dreams build their nest with fragments
dropped from day's caravan.

Spring scatters the petals of flowers
that are not for the fruits of the future,
but for the moment's whim.

Joy freed from the bond of earth's slumber
rushes into numberless leaves,
and dances in the air for a day.

My words that are slight

may lightly dance upon time's waves
when my works heavy with import have
gone down.

Mind's underground moths
grow filmy wings
and take a farewell flight
in the sunset sky.

The butterfly counts not months but moments,
and has time enough.

＊

一部の連構成は勿論、訳もかなり拓次の確信犯で改変が行われている。但し、私は第三文明社刊の「タゴール著作集」の詩集部（二巻）を所持するが、そこで（第二版巻「詩集Ⅱ」一九八四年刊）の大岡信の訳を見るに、同じ版を訳したとすれば、それも、甚だ不審な箇所があって、原文に即するとなら、寧ろ、拓次の訳の方が腑に落ちたことを言い添えておく。」

薔薇の連禱

グルモン

——上田敏氏の譯し落した部分から——

青銅の色の薔薇の花、　太陽に灼(や)かれた煉粉、　青銅の色の薔薇の花、　烈しい投槍がお前の肌にあたつて潰(つぶ)れる、　僞善の花、　無言の花。

火の色の薔薇の花、　背いた肉のために特別な坩堝(るつぼ)、　火の色の薔薇の花、　おゝ子供の時の同盟者の天命、　僞善の花、　無言の花。

肉色の薔薇の花、　魯鈍な、　健康の滿ちた薔薇の花、　肉色の薔薇の花、　お前は吾等に非常に赤い又溫和な酒を飲ませて、　そそのかす、　僞善の花、　無言の花。

櫻色の繻子の薔薇の花、　凱旋した唇の優美な寬大、　櫻色の繻子の薔薇の花、　彩(いろど)つたお前の口は吾等の肉の上に、　迷想(めいさう)の葡萄色の印章を置いた。

處女の心の薔薇の花、　まだ話したことのない、　ぼんやりした淡紅色(ときいろ)の靑年、　處女の心の薔薇の花、　お前は吾等に何も言はなかつた、　僞善の花、　無言の花。

すぐり色の薔薇の花、　汚辱と可笑(をか)しい罪惡の赤い色、　すぐり色の薔薇の花、　人々がお前の外衣(うはおほひ)を大層皺(しわ)にした、　僞善の花、　無言の花。

夕暮の色の善薇の花、　退屈に半ば死んだ人、　晩霞の煙、　夕暮の色の薔薇の花、お前は勞れたお前の手を接吻しながら戀わづらひをする、　僞善の花、　無言の花。

紫水晶の薔薇の花、　朝の星、　司教の慈愛、　紫水晶の善薇の花、　お前は信心深い、やはらかい胸の上に眠る、　聖母マリアに捧げた寶玉、　おゝ玉のやうな修道女、　僞善の花、　無言の花。

濃紅色の薔薇の花、　羅馬教會の血の色の薔薇の花、　濃紅色の薔薇の花、　お前は戀人の大きい眼を想ひ出させる、　彼女の靴下留めの結び目にひとりならずお前をさすだらう、　僞善の花、　無言の花。

法王の薔薇の花、　世界を祝福する御手から水そそぐ薔薇の花、　法王の薔薇の花、

黄金のお前の心は銅のやうである、　空しい花冠の上に珠となる涙は、　それはクリストのおなげきである、　僞善の花、　無言の花。

僞善の花。
無言の花。

［やぶちゃん注：レミ・ド・グールモン（Remy de Gourmont　一八五八年～一九一五年）はフランスの批評家・詩人・小説家。ノルマンディーの名門の出身で、カーン大学に学び、後、パリの国立図書館司書となるが、免官された。『メルキュール・ド・フランス』（*Mercure de France*）誌に載せた論文「愛国心という玩具」（*Le Joujou patriotisme*：一八九一年四月）の過激な反愛国主義的口調のためであった。その頃、今一つの不幸が彼をみまう。「真性皮膚結核（true cutaneous tuberculosis）」の「尋常性狼瘡（lupus vulgaris）」（皮膚結核の一型。病態により違いがあるが、私がネットで確認出来たものでは、かなり激しい顔面の特に頬に出現することが多い、不整形の強い紅色を呈した凹凸が生じ、ひどくなると顔が崩れたように見える）という病いが醜い跡を顔に残して、一層の孤独幽閉の生活を強いられたからである。この二つの出来事と重なり合って始まる彼の文学活動は、象徴主義的風土と充実した生の現実、知的生活と感覚的生活、プラトニックな恋愛と官能的恋愛の間を、絶え間なく微妙に揺れ動きつつ、バランスを保った。有名な「シモーヌ」（*Simone, poème champêtre*：一九〇一年）詩編を含む「慰戯詩集」（*Divertissements. Poèmes en vers*：一九一二年）、二十世紀を見事に先取りした作品「シクスティーヌ或いは頭脳小説」（*Sixtine, roman de la vie cérébrale*：一八九〇年）、そして、特に傑作とされる「悍婦（アマゾーヌ）への手紙」（*Lettres à l'Amazone*：一九一四年）等、孰れも前記のテーマに沿っている。批評家としての彼は、「観念分離」なる用語を用いて、観念、或いは、イメージの月並み部分を排除することを説いたが、実をいうと、例の反愛国主義的論文も、それの一例であった。批評での知られた作品が多い（以上は小学館「日本大百科全書」を主文に用いた）。

本詩篇の原形は彼の最初期の詩篇で、一八九二年『メルキュール・ド・フランス』社刊の「薔薇連禱」（*Litanies de la rose*）の一部である。但し、所持する一九六二年岩波文庫「上田敏全訳詩集」（山内義雄・矢野峰人編）の「解題」に従うなら、上田が行った抜粋訳は同社の一八九六年刊の「*Le Pèlerin du silence, contes et nouvelles*」（「沈黙の巡礼者、物語と短編小説」）に載る版を元にした訳で大正二（一九一三）年一月発行の北原白秋編集の文芸誌『朱欒（ザンボア）』（三ノ一）に発表されたものである。**原詩全体はフランス語サイトのこちらにある四十八連（冒頭の「Fleur hypocrite,」と下げの「Fleur du silence.」、及び最後の「Fleur hypocrite,」と「Fleur du silence.」を独立一連と数えた）からなるものが初版のものである。**上田敏の訳した分は、彼の訳詩集「牧羊神」（上田の死から四年後の大正九年十月に金尾文淵堂から刊行）に載り、国立国会図書館デジタルコレクションのこちらから視認

出来るが、**六十三連を数える**。読み難ければ、「青空文庫」のこちらに、概ね正字化（残念ながら、題名が「薔薇連祷」なのは鼻白んだ）されてあるので見られたいが、異様に連数が多いのはやはり、「沈黙の巡礼者、物語と短編小説」に載る版をもとにしているからであろうか。そちらの後発版の原詩を探す気には、もう、なれない。悪しからず。

なお、以上の本文では、一箇所だけ、操作を加えた。それは第七連目の「晩霞の煙、　」の箇所である。この「晩霞の煙」は底本では行末にきており、読む分には改行で意識上では無意識にブレイクが入って違和感がないのであるが、以下に示す岩波の原子朗氏の版では、「晩霞の煙、」となっているのである。これは物理的に、底本の版組が、行末に禁則処理としての読点を打てない組版であったが故に、かくなったものと考えられるからである。そもそも「晩霞の煙夕暮の色の薔薇の花、」では、詩句として全く以って成立していない。されば、「、　」を挿入したものである。

「すぐり色」「赤い色」と続くから、これはユキノシタ目スグリ科スグリ属フサスグリ *Ribes rubrum* ととる。漢字では「房酸塊」で、当該ウィキによれば、『ヨーロッパ原産。果実の色が赤色の系統をアカスグリ（赤すぐり、レッドカーラント）、白色の系統をシロスグリ（白すぐり）と呼ぶ。黒色のクロスグリ（カシス）は別種である。別名としてフランス語由来でグロゼイユ（Groseille）とも』あり、まさに上記の初版詩篇にもこの一連はあった。

＊

Rose groseille, honte et rougeur des péchés ridicules, rose groseille, on a trop chiffonné ta robe, fleur hypocrite, fleur du silence.

＊

である。

但し、**どうも、拓次の本詩集の本篇は、不全なものであるらしい。原子朗編「大手拓次詩集」（一九九一年岩波文庫刊）に載るものは、二十三連あるからである。**以下に本底本詩集に合わせて恣意的に概ね正字化し、操作（原氏のもので添えられてある一部の読みを添えた。これは拓次が振ったもので、読みが振れると判断されたものを原氏がチョイスして挿入したものである。拓次の原稿は概ね漢字にルビを振ってあるのだそうである）を加えたものを以下に示す。原氏のそれでは、各連の頭が行頭で、二行目に及ぶ時は、二行目以降は総て一字下げであるが、ブログではブラウザの不具合が生ずるので無視し、本詩集と同様にした。而して、**これは初版のフレーズやコンセプトと概ね一致を見る**。

＊

薔薇の連禱　グルモン

――上田敏氏の譯し落した部分から――

青銅の色の薔薇の花、　太陽に灼(や)かれた煉粉、　青銅の色の薔薇の花、　烈しい投槍がお前の肌にあたつて潰(つぶ)れる、　僞善の花、　無言の花。

火の色の薔薇の花、　背いた肉のために特別な坩堝(るつぼ)、　火の色の薔薇の花、　おゝ子供の時の同盟者の天命、　僞善の花、　無言の花。

肉色の薔薇の花、　魯鈍な、　健康の滿ちた薔薇の花、　肉色の薔薇の花、　お前は吾等に非常に赤い又溫和な酒を飮ませて、　そそのかす、　僞善の花、　無言の花。

櫻色の繻子の薔薇の花、　凱旋した脣の優美な寬大、　櫻色の繻子の薔薇の花、　彩(いろど)つたお前の口は吾等の肉の上に、　迷想(めいさう)の葡萄色の印章を置いた。

處女(をとめ)の心の薔薇の花、　まだ話したことのない、　ぼんやりした淡紅色(ときいろ)の青年、　處女の心の薔薇の花、　お前は吾等に何も言はなかつた。　僞善の花、　無言の花。

すぐり色の薔薇の花、　汚辱と可笑(をか)しい罪惡の赤い色、　すぐり色の薔薇の花、　人人がお前の外衣(うはおほひ)を大層皺(しわ)にした、　僞善の花、　無言の花。

夕暮の色の善薇の花、　退屈に半ば死んだ人、　晩霞(ゆふやけ)の煙、　夕暮の色の薔薇の花、お前は勞(つか)れたお前の手を接吻しながら戀わづらひをする、　僞善の花、　無言の花。

あをい薔薇の花、　虹色の薔薇の花、　シメールの眼の花の怪物、　あをい薔薇の花、お前の瞼(まぶた)をすこしお開(あ)け、　お前はお前が人に見られるのが怖いのか、　眼のなかの眼シメールよ、　僞善の花、　無言の花。

みどりの薔薇の花、　海の色の薔薇の花、　女怪(シレーヌ)の臍(へそ)、　みどりの薔薇の花、　波のやうにゆらゆらする又物語めいた寶玉、　指がお前に觸れたなら、　そのままお前は水になる、　僞善の花、　無言の花。

紅玉色の薔薇の花、　龍の黑い額に咲いた薔薇の花、　紅玉色の薔薇の花、　お前は帶の留金にすぎない、　僞善の花、　無言の花。

朱色の薔薇の花、　溝のなかに寢ころんでゐる戀された田舍娘、　朱色の薔薇の花、牧者はお前を熱望し、　また牡山羊はお前を食べた、　僞善の花、　無言の花。

墓場の薔薇の花、　屍(しかばね)から發散する冷氣、　全く可愛らしい淡紅色(ときいろ)の墓場の薔薇の花、

美しい腐敗の心持の好い薫、　お前は食物(たべもの)の風(ふり)をする、　僞善の花、　無言の花。

暗褐色の薔薇の花、　陰鬱な桃花心木(アカジウ)の色、　暗褐色の薔薇の花、　正しい悦び、　智慧、愼重と豫知、　お前は赤い眼で吾等を視る、　僞善の花、　無言の花。

罌粟色(けしいろ)の薔薇の花、　一様な娘達のリボン、　罌粟色の薔薇の花、　少さい人形の名譽、お前は愚かか狡猾か、　少さい兄弟の玩具(おもちや)よ、　僞善の花、　無言の花。

赤と黒との薔薇の花、　怠惰と祕密の薔薇の花、　赤と黒との薔薇の花、　お前の怠惰とお前の赤は德をつくる讓和(じやうわ)のなかに青白くなつた、　僞善の花、　無言の花。

石盤色の薔薇の花、　ぼんやりした德の鼠地(ねずぢ)の浮彫(うきぼり)、　石盤色の薔薇の花、　お前は、年とつた寂しい長椅子にのぼり、　そのまはりに花をひらく、　夕暮の薔薇の花、　僞善の花、　無言の花。

芍藥色の薔薇の花、　豐かな庭の謙讓な虛榮、　芍藥色の薔薇の花、　風は偶然にお前の葉を捲きあげるばかりだ、　それでお前は不滿ではなかつた、　僞善の花、　無言の花。

雪のやうな薔薇の花、　雪とそして鵠(はくてう)の羽の色、　雪のやうな薔薇の花、　お前は雪が脆いことを知つてゐて、　お前はもつとめづらしい時でなければお前の鵠の羽をひらかない、　僞善の花、　無言の花。

透明な薔薇の花、　輝く泉の色が草のなかから噴き出る、　透明な薔薇の花、　Hylas(イラス)はお前の眼を愛した事から死んだ、　僞善の花、　無言の花。

蛋白石の薔薇の花、　おお、　女部屋の匂ひのなかに寢かされたトルコ皇后、　蛋白石の薔薇の花、　變らない愛撫のけだるさ、　お前の心は、　滿足した不德の深い平和を知つてゐる、　僞善の花、　無言の花。

紫水晶の薔薇の花、　朝の星、　司教の慈愛、　紫水晶の善薇の花、　お前は信心深い、やはらかい胸の上に眠る、　聖母マリアに捧げた寶玉、　おお玉のやうな修道女、　僞善の花、　無言の花。

濃紅色の薔薇の花、　羅馬(ローマ)教會の血の色の薔薇の花、　濃紅色の薔薇の花、　お前は戀人の大きい眼を想ひ出させる、　彼女の靴下留めの結び目にひとりならずお前をさすだらう、　僞善の花、　無言の花。

法王の薔薇の花、　世界を祝福する御手から水そそぐ薔薇の花、　法王の薔薇の花、
黄金のお前の心は銅のやうである、　空しい花冠の上に珠となる涙は、　それはクリストのおなげきである、　僞善の花、　無言の花。
僞善の花。
無言の花。

＊

二箇所の「少」（ちひ）「さい」の漢字表記はママ。
「シメール」は、初出の以下に出る。

＊

Rose bleue, rose iridine, monstre couleur des yeux de la Chimère, rose bleue, lève un peu tes paupières : as-tu peur qu'on te regarde, les yeux dans les yeux, Chimère, fleur hypocrite, fleur du silence !

＊

この「Chimère」は生物学の「キメラ細胞」（chimer：同一の個体内に異なる遺伝情報を持つ細胞が混じっている状態及びそうした生物個体）の語源であるギリシア神話に登場するハイブリッドの怪物キマイラ（Chimaira）のフランス語である（音写は「スィメール」）。
「女怪（シレーヌ）」も初出に出る。

＊

Rose verte, rose couleur de mer, ô nombril des sirènes, rose verte, gemme ondoyante et fabuleuse, tu n'es plus que de l'eau dès qu'un doigt t'a touchée, fleur hypocrite, fleur du silence.

＊

「sirènes」はギリシア神話で同じみの歌声で船乗りを誘惑する人魚型妖怪「セイレン」。音写は「シレェーヌ」。
「桃花心木（アカジウ）」初出の以下。

＊

Rose brune, couleur des mornes acajous, rose brune, plaisirs permis, sagesse, prudence et prévoyance, tu nous regardes avec des yeux rogues, fleur hypocrite, fleur du silence.

＊

「acajous」（アカジュゥ）はマホガニーのこと。高級家具材・楽器材として知られるムクロジ目センダン科マホガニー属 *Swietenia* は北アメリカのフロリダや西インド諸島原産で、心材は赤み掛かった色をしている。
「譲和」相手のことを思いやり、譲る気持ちがあれば、双方の利益が調和し、互いに幸せになることが出来る状態を指す。出雲大社に伝わる教えにある語だが、それを拓次は知っていて使ったものかどうかは判らぬ。

「鵠（はくとう）」平安以来の白鳥（はくちょう）の古名。「くゝひ」「くゝひ」。広義の「白鳥」（鳥綱カモ目カモ科ハクチョウ属 *Cygnus* 或いは類似した白い鳥）の古名であるが、辞書によっては、ハクチョウ属コハクチョウ亜種コハクチョウ *Cygnus columbianus bewickii* ともする。本邦ならそれだが、初出は以下。

＊

Rose neigeuse, couleur de la neige et des plumes du cygne, rose neigeuse, tu sais que la neige est fragile et tu n'ouvres tes plumes de cygne qu'aux plus insignes, fleur hypocrite, fleur du silence.

＊

フランス語の「cygne」（スィーニャ）は、ここではまず、ハクチョウ属オオハクチョウ *Cygnus cygnus* であろう。

「Hylas（イラス）」初版のこと。

＊

Rose hyaline, couleur des sources claires jaillies d'entre les herbes, rose hyaline. Hylas est mort d'avoir aimé tes yeux, fleur hypocrite, fleur du silence.

＊

「Hylas」（ユーラス）はギリシア神話のヒュラース。ヘーラクレースに仕え、彼に愛された美少年。しかしヘーラクレースに従って黄金の羊を求めるための「アルゴ探検隊」に参加したものの、美しさ故に泉のニンフに攫われて失踪したとされる。

「蛋白石」「opale」（オパァル）で「オパール」のこと。初版の以下。

＊

Rose opale, ô sultane endormie dans l'odeur du harem, rose opale, langueur des constantes caresses, ton cœur connaît la paix profonde des vices satisfaits, fleur hypocrite, fleur du silence.

＊

この「トルコ皇后」は「sultane」（シュルタンナ）、トルコ語で「厳しく立ち入ることが管理された女性の居室」を言う「ハレム」で寝ているオスマン・トルコ皇帝の妻を指す。」

古い眞鍮の壺　コンクリング

ふるい眞鍮の壺が隅のはうにゐてちかちかひかり、
臺所の鍋（バン）にむかつてしかめつつらをしてゐる。
強情な王様のやうに
ぢつとすわりこんで不氣嫌な顔をして……
私が見えなくなると
ほかの者を追ひつかふ。
あの壺は女神（めがみ）からもらつた賜なのだ。
私はどうしたらいいだらう？

私がほしいといへば、
壺はお米を煮てくれる。
お汁（つゆ）がほしいといへば、
それもこしらへてくれる。
あいつは魔怯だ、
けれど始終ぶつぷつつぶやいてゐる。
あいつさへゐなければ、
私の小屋（こや）もほんとに樂しく愉快なのだけれど、
窓のそとにはウイスタリアの花がひろびろと咲いてゐて……
私はどうしたらいいだらう？

壺はフライパンに
鉤（かぎ）の上にとまれといひつけた……
それからきぴしいこゑで
ほかの鍋（バン）にもいひつけた……
みんな私のこぢんまりした臺所で
幸福にくらせるのに！
教へてください——きつと貴方はそつと教へてくれるにちがひない——
私はどうしたらいいだらう？

［やぶちゃん注：**詩人ヒルダ・コンクリング（Hilda Conkling　一九一〇年～一九八六年）**

については、本書巻末の目次の名の後に、『(十三歳の少年詩人)』とある(編者の逸見享氏による書き入れか)。私は知らなかったし、日本語で検索をかけても、誰も書いていない。名前の英文綴りを適当に調べて検索したところ、英文ウィキのこちらで、発見した。而して、この詩人は「少年」ではなく、「少女」である。大手拓次は昭和九(一九三四)年四月十八日に亡くなっているが、その時点でも彼女は二十四歳である。そのウィキによれば、彼女の父はマサチューセッツ州ノーサンプトンにあるスミス大学の英語の助教授で、ヒルダはニューヨーク州生まれ。父親は彼女が四歳の時に亡くなっている。未だ幼い四歳から十四歳にかけて、その詩の殆んどを作り、彼女自身は、それらを自分では書き留めていなかった。しかし、彼女の母親が会話の中に出てくるそれらの詩篇をその場で、或いは後で記憶をもとに書き留めておいた、とある。ヒルダが大きくなるにつれ、母は詩を記録することをやめ、また、ヒルダ自身、成人になってからは、自ら詩を書いたことも知られていない、とある。ヒルダの詩の殆どは自然に関わるもので、時には単に説明的なものもあれば、ファンタジーの要素が混じったものもある。他の多くのテーマは、母親への愛、物語や空想、彼女を喜ばせた写真や本を対象としているが、これらのテーマの多くは独立してあるのではなく、絡み合っている、とある。彼女は、植物や動物の描写にしばしば比喩を利用している、ともあった。ヒルダの詩が収められた三冊の詩集は、彼女の生前に出版されており、「幼い少女の詩」(*Poems by a Little Girl*:一九二〇年刊。アメリカの古典復興への回帰を主唱したイマジスト派の女流詩人エイミー・ローレンス・ローウェル(Amy Lawrence Lowell 一八七四年~一九二五年)の序文附き)・「風の靴」(Shoes of the Wind:一九二二年刊)、「銀の角」(Silverhorn:一九二四年)がそれである。彼女の詩は、二種の詩のアンソロジーにも採られてあり、彼女については、詩を含め、その最初の詩集以前に、多くの雑誌に掲載された、ともある。第一詩集に載る彼女ポートレートはこれである。しかし、「Internet archive」の彼女のページを見るに、他にも著作があることが判る。

さて、そこで調べてみたところ、本篇は、詩集「*Shoes of the wind*」の「*The old brass pot*」であることが判った。以上の原著の当該部を参考にして原詩を引く。

＊

THE OLD BRASS POT

The old brass pot in the comer
Shines and scowls at the kitchen pans;
Like a stubborn king
He sits and frowns . . .
Orders them about
When I'm not looking.
He was a gift from the fairy queen . .

What can I do ?

He boils rice when I want it,
Makes broth when it is needed.
He is magic
But he growls all day.
Without him it would be pleasant and comfortable
In my little cottage
With wistaria growing over the open windows . . .
What can I do ?

He tells the frying pan
To stay on its hook . . .
He shouts at the other pans
In a gruff voice . . .
They all might be so happy
In my cozy kitchen !
Tell me . . . but you must whisper . . .
what can I do ?

＊

「ウイスタリア」（wistaria）は「wisteria」と同じで、「藤」マメ目マメ科マメ亜科フジ連フジ属 *Wisteria* のフジ類を指す。本邦で愛されるフジ（ノダフジ） *Wisteria floribunda* とヤマフジ *Wisteria brachybotrys* は日本固有種であるが、**アメリカにはアメリカ固有種のアメリカフジ *Wisteria frutescens* が植生するから、それである。**」

野のチユーリツプ　コンクリング

鬼百合の葉のやうにまだらがあり、
まつくろい頸飾（くびかざ）りをつけたチユーリツプを
（そこにはみどりの覆ひをもつてゐる）
神様はこしらへたのだ、
また、　神様は動いてゆく寶石のやうな氷河をつくつた、
神様は日にかがやく眞赤な雲のやうなチユーリツプをもつくつた。
けれど私にはわからないよ、
どうして、　それが花になつたり、
また大きな夢のやうな氷河になつたりするのか？

［やぶちゃん注：作者のついては、前回の私の注を参照されたい。本篇は、前回の詩篇と同じく、彼女の詩集「*Shoes of the wind*」の「*Wild Tulip*」である。以上の原著の当該部を参考にして原詩を引く。

＊

WILD TULIP

Mottled like the tiger-lily leaf,
With black necklace clinging,
(Of course it has a green cloak I)
God has made a tulip.
He made the glacier like a moving jewel.
He made the tulip
Like a red cloud lighted by the sun.
I wonder how it feels to make a flower
Or a glacier like a great dream !

＊］

郡の市場　イルビング

馬と騾馬、　牛と羊、
犬小屋のなかの犬、　檻（をり）のなかの豚、
ひよつこと鳩、　北京鴨（ぺきんがも）、
七面鳥にほろほろてう、
りんごと梨とさつまいも、　穀物
めづらしい寶石のやうに綺麗なジエリー、
黄色い南瓜（とうなす）と薄荷棒（はつかぼう）、
郡（ぐん）の市場へおいでなさい。
ぴゆるぴゆる、　ひんひん、
めえめえ、　わんわん、
けつこう、　こつこ、　チユーチユー、　ギヤーギヤー、
もうもう、　クウクウ、　またゴウルゴウル、
けえけえいふ角笛、　とキーキーいふ車のわだち、
よろこんで大さわぎする叫びごゑ、
『おい、　そりやじやうだんだよ、　君』
大笑ひと、　いちやつきと、　レモン水、
郡の市場へおいでなさい。

［やぶちゃん注：巻末の目次に「ミンナ・イルビング」とあるのだが、ミンナ・アーヴィングで Minna Irving の綴りで調べると、同名で生没年の異なる女性詩人がいるのだが、当該詩篇を見出せず、お手上げ。識者の御教授を乞うものである。

「騾馬」哺乳綱奇蹄目ウマ科ウマ属ラバ *Equus asinus* × *Equus caballus* 。♂のロバ（ウマ属ロバ亜属アフリカノロバ亜種ロバ *Equus africanus asinus* と♀のウマの交雑種の家畜、北米・アジア（特に中国）・メキシコに多く、スペインやアルゼンチンでも飼育されている。逆の交配（♂のウマと♀のロバの配合）で生まれる家畜をケッテイ（駃騠：ウマ属ケッテイ *Equus caballus* × *Equus asinus*）と呼ぶが、ケッテイと比較すると、ラバは育てるのが容易であり、体格も大きいため、より広く飼育されている。私の「和漢三才圖會卷第三十七　畜類　騾（ら）　（ラバ／他にケッティ）」を参照されたい。］

濕氣ある月　バタイユ

洗濯場の灰色の玻璃窓から、
そこに、　秋の夜の傾くのを見た。
誰かしら、　雨水の溜つた溝に沿うて歩いてゆく、
旅人よ、　昔の旅人よ、
羊飼が山から降る時に
お前の行く所に急げよ。
お前の行く所に竈(かまど)火は消えてゐる。
お前がたどりつく國には門が閉ざされてゐる。
廣い路は空しく、　馬ごやしの響(ひびき)は恐ろしいやうに遠くの方から鳴つて來る、
急いで行けよ。
古びた馬車のともしびが瞬いてゐる、
これが秋だらう。
秋はしつかりとして、　ひややかに眠つてゐる、
厨房(くりや)の底の藁の椅子の上に、
秋は葡萄の蔓(つる)の枯れた中に歌つてゐる。
此時に、　見出されない屍、
青白い溺死者は波間に漂ひながら夢見てゐる。
起り來る冷たさを先づ覺えて、
深い深い甕(かめ)のなかに隱れやうと沈んでゐる。

［やぶちゃん注：アンリ・バタイユ（Henry Bataille　一八七二年～一九二二年）はフランスの詩人で劇作家。ニーム生まれ。美術学校に入り、画家を志したが、二十二歳で文学に転じた。一八九五年、詩人としての処女詩集「白い部屋」（*La Chambre blanche*）を出し、「美しき航海」（*Le Beau Voyage*：一九〇四年）などを発表したが、評価されず、後に戯曲転校して成功を収め、当該ウィキによれば、『第一次世界大戦前のフランス劇壇の流行児となった』。『生前は』、『現代生活における愛や感情の危機を描いてもてはやされたが、今日では』、『彼の言う「正確なリリシズム」なるものが、不健康な主題や』、『あいまいな境遇を』、『ロマン的な虚飾で飾り立てたものに過ぎないと見なされて』おり、彼の『作品が上演されることは』、『ほとんどない』とある。原詩は発見出来なかった。
最終行の「隱れやう」はママ。］

なお、本篇は原子朗編「大手拓次詩集」（一九九一年岩波文庫刊）に収録されているのであるが、**明かに有意に本篇とは異なった原稿に拠ったものと思われるもの**であるので**（助詞・表記（「ゐる」の一部が複数「る」となっている）・句読点・改行違い・行空け（原氏のそれは三連構成。但し、これは原氏が原詩に基づいて行った仕儀の可能性が高いが、そのままそれを採用する）と、明確な異同が、多数、ある）**、以下に、以上の本篇をベースとして、その復元（原氏のそれは新字体）を試みる。

＊

濕氣ある月　アンリ・バタイユ

洗濯場の灰色の玻璃窓から、
そこに、　秋の夜の傾くのを見た。
誰かしら、　雨水の溜つた溝に沿うて歩いて行く、
旅人よ、　昔の旅人よ、
羊飼が山から降りる時に
お前の行く所に、　急げよ。

お前の行く所に竈（かまど）の火は消えてゐる。
お前のたどりつく國には門が閉ざされてゐる。
廣い路は空しく、　馬ごやしの響（ひびき）は恐ろしいやうに遠くの方から鳴つて來る。　急いで行けよ。
古びた馬車の燈火（ともしび）が瞬いてる、
これが秋だらう。

秋はしつかりとして、　ひややかに眠つてる、
厨房（くりや）の底の藁の椅子の上に、
秋は葡萄の蔓（つる）の枯れた中に歌つてる。
此時に見出されない屍、
青白い溺死者は波間に漂ひながら夢みてる。
起り來る冷たさを先づ覺えて、
深い深い甕（かめ）のなかに隱れようと沈んでゐる。

＊」

若い女のやうな春　ベンネツト

おほきく眼をひらいた街のかなたに
子を産んだ若い女のやうな春が
ためらひがちな足どりでやつてきた。
鋼（はがね）のやうな冷（つめ）たい霙がふり、
さけたみどりの莖のやうに吹きあれた風も
もはや　たえだえになり、
その眼のかげにかくれてゐる
ヒヤシンス色の夜のとばりも
菫と薔薇とのおぼろのなかに消えうせる。

［やぶちゃん注：Laura Bennett で探してみたが、人物も詩篇も見出せなかった。識者の御教授を乞う。］

唄

モーアランド

かなしみをもてわれをとらへ、　いましめよ、
なほも、　恐れをもてわが心を　刺(さ)せよ、
もえあがるよろこびのちさきほのほを
なみだもて消せよ。

汝(な)が知れるかぎりの敏(さと)き手だてを試みよ、
すべてのたくみなるわざを用ゐよ……
されど　されど　わが心のなかのうたごゑを
なれはとめえじ！

［やぶちゃん注：アメリカの詩人・作家ジョン・リチャード・モーアランド（John Richard Moreland　一八七八年～一九四七年）はバージニア州ノーフォークで生まれで、同地で没した。一九二一年に詩誌『poetry』を創刊している。原詩は探し得なかった。
「用ゐよ」はママ。］

Nereid　ブーシキン

タウリスの黄金の岸辺に接吻する白線の波にあひだに、
私は海の女神を見た、　曙が空のはてにひらめくとき。
私はオリーブの木の間にかくれて吐息をつかうとした、
この若い半神の女神が海のうへにのぼるとき。
彼女のわかい白鳥のやうに白い胸は高まる水の上にみえ、
彼女のやはらかい髪の毛から浮める花環のなかに泡をしぼり出す。

［やぶちゃん注：二行目末は底本では、何かが打たれているようだが、甚だ薄く、句点か読点かは不明である。取り敢えず、四行目に倣って句点を配した。作者は言うまでもないが、ロシア近代文学の嚆矢とされる大詩人アレクサンドル・セルゲーヴィチ・プーシキン（Александр Сергеевич Пушкин／ラテン文字転写：Aleksandr Sergeyevich Pushkin　一七九九年～一八三七年）である。恐らくは、英訳からの重訳と思われる。ロシア語の原詩と英訳が載るこちらの英文サイトをリンクしておく。

「Nereid」英語音写は「ネレイド」。ギリシア神話に登場する海に棲む女神たち、或いはニンフたちの総称。「ネーレーイス」「ネレイス」（以上、単数形）「ネーレーイデス」「ネレイデス」（以上、複数形）と呼ばれる。当該ウィキによれば、『彼女たちは「海の老人」ネーレウスとオーケアノスの娘ドーリスの娘たちで』、『姉妹の数は』五十『人とも』百『人ともいわれ』、『エーゲ海の海底にある銀の洞窟で父ネーレウスとともに暮らし、イルカやヒッポカムポス』（神獣で半馬半魚の海馬）『などの海獣の背に乗って海を移動するとされた』とある。

「タウリス」Taurus（英語の音写は「トォーラス」）。西洋の占星術で「黄道十二宮」（the signs of the zodiac）の「牡牛座（おうしざ）」（金牛宮（きんじゅうきゅう））を指す。］

うた　カアン

おおはなやかなきれいな四月、
おまへの陽氣な唄のこゑ、
白いリラ、　さんざしの花、　枝をもれくる黄金（こがね）の日ざし、
でもわたしに何であろ、
可愛い女は遠くへはなれ、
北國のさ霧のなかにゐるものを。

おおはなやかなきれいな四月、
二度の逢瀬はつれないゆめよ、
おおはなやかなきれいな四月、
かあい女がまたやつてくる。
リラの花、　黄金（きん）の日ざしの花かざり、
もう、　わたしは有頂天、

はなやかなきれいな四月。

［やぶちゃん注：ギュスターヴ・カーン（Gustave Kahn　一八五九年～一九三六年）はフランスの詩人。サイト「鹿島茂コレクション」の「18,19世紀の古書・版画のストックフォト」のこちらによれば、メッス生まれ。国立古文書学校を卒業後、四年間、アフリカに滞在した。その後、パリで『ヴォーグ』（*La Vogue*：「流行・人気」の意）、『独立評論』（*Revue independante*）の『両誌で、編集者としてアルチュール・ランボー、ジュール・ラフォルグらの作品を積極的に紹介し、また、自ら』も、詩人として「自由詩」（Vers libre）を『実践することで当時の文学運動の中心的存在となった。また美術批評も多く残しており、紹介文を書いている』美術評論家『フェリクス・フェネオン Felix Feneon』（一八六一年～一九四四年）『とともに後期印象派の画家たちを擁護した』とある人物である。幾つかのフランス語の単語で検索したが、原詩は遂に見当たらなかった。
「リラ」フランス語「Lilas」。モクセイ目モクセイ科ハシドイ属ライラック *Syringa vulgaris* のこと。紫色の花がよく知られるが、白いものもある。学名のグーグル画像検索をリンクさせておく。
「さんざし」「山査子・山楂子」で落葉低木のバラ目バラ科サンザシ属 *Crataegus*。タイプ

種はサンザシ *Crataegus cuneata*。同前（属名）でリンクを張っておく。」

思ひ出　ビーク

水仙よ、　水仙よ。
お前からこぼれるちいさな笑ひ、
日のひかりかがやくなかの絨毯について、
私の戀が思ひだすいろいろ……
私の覺えてゐるあの幸福な、　やさしい戀よ、
お前はどこにゐるのか、　お前はどこにゐるのか？
かつては縁であつたこの牧場（まきば）のうへに、
影のかけぎぬが一面におほうてゐる。
この世が悦びとして誇るすべてのものは、
わかれなければならない。
けれど、　百合の花や、　おまへの笑ひごゑや、
またそれからうまれる思ひ出の夢は、
いつまでも生きてゐる、
ただ私の心のなかに生きてゐる。

［やぶちゃん注：テオ・ヴァン・ビークなる詩人は探し得なかった。識者の御教授を乞うものである。］

お前はまだ知つてゐるか　デーメル

まだお前は知つてゐるか、
ひるの數多い接吻のあとで
わたしが五月の夕暮のなかに寢てゐた時に
わたしの上にふるへてゐた水仙が
どんなに青く、　どんなに白く、
お前のまへの足のさわさわとさはつたのを。

六月眞中の藍色の夜のなかに
わたし達が荒い抱擁につかれて
お前の亂れた髪を二人のまはりに絡(から)んだとき、
どんなにやはらかくむされるやうに
水仙の香が呼吸をしてゐたかを
お前はまだ知つてゐるか。

またお前の足にひらめいてゐる、
銀のやうなたそがれが輝くとき、
藍色の夜がきらめくとき、
水仙の香は流れてゐる。
まだお前は知つてゐるか、
どんなに暖かつたか、　どんなに白かつたか。

［やぶちゃん注：リヒャルト・フェードル・レオポルト・デーメル（Richard Fedor Leopold Dehmel　一八六三年～一九二〇年）はドイツの詩人。当該ウィキによれば、『プロイセン、ブランデンブルク州ダーメ＝シュプレーヴァルト郡の小村に山林監視人を父として生まれる。教師と対立してギムナジウムを放校されたのち、ベルリンとライプツィヒの大学で自然科学、経済学、文学などを学ぶ。その後火災保険の職に就き、仕事の傍ら』、一八九一『年に処女詩集』「救済」（*Erlösungen*）を『刊行、これをきっかけに』、詩人デトレフ・フォン・リーリエンクローン（Detlev von Liliencron　一八四四年～一九〇九年）『との交際が始ま』った。一八九五から『文筆専業となり』、一八九六『年に代表的な詩集』「女と世界」（*Weib und Welt*）を『刊行』、一九〇一『年より』、『ハンブルク郊外のブランケネーゼに

永住した。一九一四年から一九一六年まで『自ら志願して第一次世界大戦に従軍し』たが、『終戦後の』一九二〇『年に戦争時の傷の後遺症が元で死去』したとあり、『その詩は自然主義的・社会的な傾向を持ちつつ、精神的・形而上学的なエロスによる救済願望に特徴付けられている。童話、劇作などもあり、晩年は第一次世界大戦の従軍記録も残した』。また、『彼の詩には、リヒャルト・シュトラウス、マックス・レーガー、アレクサンドル・ツェムリンスキー、アルノルト・シェーンベルク、アントン・ヴェーベルン、クルト・ヴァイルなど』、『多くの作曲家が曲を付けた。また、彼の詩を元にしたシェーンベルクの弦楽六重奏曲』「浄夜」作品四（*Verklärte Nacht*：一八九九年作曲）には特に有名である、とあった。シェーンベルクのそれは私の好きな曲である。

本篇は恐らく英訳或いはフランス語訳からの重訳で、私はドイツ語は判らないので原詩は探さなかった。」

沈默の町

デーメル

町は谷のなかに横はり、
青白い日はうすれて亡びた。
さて、　月が消え、　星の光が失せるのも間もないだらう、
そして夜がただ空を滿すのだ。

山々の峯からは、
霧が出て町をとりまく、
畑も、　家も、　また濡れた紅い家根も
この厚い織物を通すことは出来ない。
いや、尖塔や橋でさへも出來はしない。

けれど、さすらひ人が身ぶるひするとき。
その暗い丘に
光りの條（すぢ）が彼の心を悦ばす、
そして、　烟と靄と子供らの聲から
讃美の歌がはじめられる。

［やぶちゃん注：作者については、前回の私の注を参照されたい。また、そちらと同じ理由で原詩は示さない。
「横はり」「よこたはり」。］

麥畑のなかの死　クローン

罌粟の花と實つた麥のなかに
ひとりの兵士が、　誰にも知れずに、
もう二日二夜といふもの、　繃帶もされず、
うづき出した傷に
死んだやうになつてゐる。

熱病のやうに荒い脈搏がはげしく打つてゐる。
死の苦篇のうちに彼は頭をもたげた。
彼は夢のなかに、　とほいとほい過去を見る、
上の方をながめてゐる、　ガラスのやうな眼で。
彼はライ麥のなかにひらめく大きい鎌のさらさらといふ音をきいた。
彼はクローバのおひしげるスヰートな牧場の香を嗅いだ。
「もうさよならだ、　なじみの土地よ、　なじみの古い人々よ、　さよならだ」
彼は頭をさげた、　そして凡てはおしまひだ。

［やぶちゃん注：作者は、前の二篇のドイツの詩人リヒャルト・フェードル・レオポルト・デーメル（Richard Fedor Leopold Dehmel　一八六三年～一九二〇年）の友人であった、同じドイツの詩人デトレフ・フォン・リーリエンクローン（Detlev von Liliencron　一八四四年～一九〇九年）。当該ウィキによれば、『キール出身』で、一八六六『年より軍隊に入り』、『普墺戦争』・『普仏戦争に従軍』し、『負傷』した。『軍隊を退いたあとは』、『一時』、『アメリカ合衆国に渡った。帰国後』、『プロイセンの官吏となり』、三十『代で詩作を始め』、「副官騎行」（*Adjutantenritte*：一八八三年刊）で『注目を集めた。軍人気質の実直さや』、『文学的な伝統にとらわれない感覚的な詩風で、印象主義の詩人として人気があった。劇作や小説も残している』とある。本篇は従軍中の経験に基づくものであろう。私はドイツ語は判らないし、他言語からの重訳と考えられるので、原詩は探さない。
「罌粟」被子植物門双子葉植物綱キンポウゲ目ケシ科ケシ属ケシ *Papaver somniferum*。
「ライ麥」単子葉植物綱イネ目イネ科ライムギ属ライムギ *Secale cereale*。
「クローバ」クローバーは被子植物門双子葉植物綱マメ目マメ科マメ亜科シャジクソウ（車軸草・トリフォリウム）属 *Trifolium* の総称。世界で二百六十種が植生する。本邦の在来種はシャジクソウ属シャジクソウ *Trifolium lupinaster* のみであるが、同種はヨーロッパに

も分布し，本邦には，知られたヨーロッパ原産のシロツメクサ（シャジクソウ属 *Trifolium* 亜属 *Trifoliastrum* 節シロツメクサ *Trifolium repens*）をはじめとする多くの種が牧草・園芸・緑肥などの目的で導入され，帰化植物となった種も多い。されば，シロツメクサをイメージして構わないと思われる。」

二　人　ホフマンスタール

彼女は彼に盃を持つて來た、
彼女の顎と口とはそれの緣（ふち）のやうであつた。
かるくかるく　またしつかりと歩いて來て、
彼女は台盃から一しづくもこぼさずに跳びはねた。
彼は、　かるいしつかりした手で、　精に充ちた火のやうな種馬を檢束した。
そして、　だらしのない身振で、
彼は、　ふるへる馬を立ちどまらした。

然し、この軽いもので滿された盃をとらうとして
彼の手がさはつたとき、
それがポンドほども重かつた。
その譯は、　彼等の二人がふるへたので
お互の手が分らなかつた、
それで、　暗い酒は地の上にこぼされた。

［やぶちゃん注：フーゴ・ラウレンツ・アウグスト・ホーフマン・フォン・ホフマンスタール（Hugo Laurenz August Hofmann von Hofmannsthal　一八七四年～一九二九年）はオーストリアの詩人・作家・劇作家。ウィーン世紀末文化を代表する『青年ウィーン』（Jung-Wien）の一員であり、印象主義的な新ロマン主義の代表的作家である。その文学的早熟性は当該ウィキを読まれたい。作品執筆にはドイツ語を用いた。詩全集は一九〇七年に刊行されている（*Gedichte*：詩（韻文））。大手拓次の訳は恐らくはフランス語からの重訳と思われるので、原詩は探さない。］

謎

ポツドマン

私は水で身躰をぬらした、
わたしの前に、　もう一つ身躰を感じてゐる
いつか、　わたしは忘れるかも知れない、
胸と胸とのあひだの影を、
それは光りの明け方を暗くし、
そしてただ淫佚に、
星が星のなかに輝くとき
わたしの思ひから消えうせる。
お前の唇の微笑は言葉であるか。
お前の心のなかに何が書いてあるか。
わたしはお前の顔のなかに沈んだが
どうしても其底に達することが出來ない

［やぶちゃん注：作者不詳。識者の御教授を乞う。
「淫佚」「いんいつ」で「淫逸」に同じ。淫（みだ）らな楽しみに耽（ふけ）り、怠けて遊ぶこと。］

あらはれ　モオクレエル

私は夕焼の中に
輕(かる)く去りゆく女を見た。
そして其姿が、　朧ろに深き夕暮の中に變るのを。

其後長い間彼等の聲は死んでゐる。
其後長い間闕の隅に
門の隅に彼等の記憶は
木葉と共に色衰へて眠つてゐる。

貪しい人のやうに
眠るために黄色い木葉を床とする
私の回想(おもひで)よ、　この記憶の上にお前を寢かし、
そしてお前を眠らせやう。

又更に記憶の下に曖昧をとるために
回想の胸のうへに記憶をおけよ。
晩霞と血の私の脣のうへに、
あゝ！
靜かなる菊の花のやうに
お前の魂は總て脣にある。

［やぶちゃん注：フランスの詩人であるカミーユ・モークレール（Camille Mauclair）はペン・ネームで、本名はカミーユ・ローレン・セレスティン・ファウスト（Camille Laurent Célestin Faust　一八七二年～一九四五年）で、小説家・美術史家・文芸評論家でもあった。芸術批評では、彼は「印象派」と「象徴主義」を支持したものの、「フォービズム」以降のアバンギャルドを激しく非難した。晩年はナチスに迎合したフランスのヴィシー政権に協力し、反ユダヤ主義を標榜してしまっている詩集に「秋のソナチネ」（*Sonatines d'automne*：一八九四年）・「血は語る」（*Le Sang parle*：一九〇四年）・「歌われた感情」（*Émotions chantées*：一九二六年）がある（以上は彼のフランス語ウィキに拠った）。原詩は、彼の忌まわしいナチズムへの迎合を知ったので、探すのは、やめた。悪しからず。］

「晩霞」この語は、次に出る同じ彼の詩「溫雅」の最終連に『晩霞(ゆふやみ)』とルビする。「ばんか」は如何にも読みとして硬いので、私は「ゆふやみ」で読みたい。」

溫　雅　モオクレエル

溫雅と　　のどけさと
そして私の上氣した額の上に下りる愛すべき身振り、
それは靜かな私の悲哀のなかのお前の手です

華やかな音樂、
そしてまた、　飽くこともない故郷の物思ひ、
鎭まぬ悲哀の音樂、
悲しめる私の心の絲に
お前の聲は沈靜なるOiselleのやうである

冷たく明るい水底にダイヤモンドの微光（ほのあかり）、
鬱陶しい私の目の反映に照らされる紫水晶、
それは私の瞳に映るお前の瞳です。

けれど、　血と晩霞（ゆふやみ）のお前の脣は
また記憶のかをりのために
回想を心と手との中にとどめてゐる。

［やぶちゃん注：前の彼の詩の私の注を参照されたい。また、同じ理由で原詩は探さない。「Oiselle」は「ワゼェル」で「雌の小鳥」を指す。俗語で蔑視を込めて「うぶで愚かな娘」をも指すが、ここでは、採らない。

なお、原子朗編「大手拓次詩集」（一九九一年岩波文庫刊）の「翻訳篇」に、本篇は載るのであるが、本詩集のものとは異なる訳稿に基づいており、有意に激しく異なるので、以上の本文を参考に恣意的に正字化して、以下に示す。

＊

溫　雅　モオクレエル

溫雅とのどけさと、
そして私の額の濕氣の上に下（お）りる所の愛すべき身振り、

それは靜なる私の悲哀に診けるお前の手です。

華やかなる音樂、
そして又、　飽くことなき故郷の物思ひ、
鎭まらざる悲哀の音樂、
悲しめる私の心の纖維の上に
お前の聲は沈靜なる Oiselle のやうである。

冷たく明るい水底にダイアモンドの微光（ほのあかり）、
鬱陶しき私の目の反映に照らさるる紫水晶、
それは私の瞳に映るお前の瞳です。

けれど、　血と晩霞（ゆふやけ）のお前の脣は
晩霞と血の私の脣の上に、
ああ！
靜かなる菊の花のやうに
唇に總てお前の魂はある。

＊」

信　心　フオルク

月は私の枕を照らし、
わたしは眠ることは出來ない、
月の光に接物されてゐる二つの手を
わたしはぢつと組み合せてゐる。

神から歸つて來た、　私の靈魂は
今やすらかに横たはつてゐる。
そして私の愛情は唯ひとつの考へを持つてゐる、
お前を幸福にしやうと。

［やぶちゃん注：詩人不詳。識者の御教授を乞う。「しやう」はママ。］

満月の夜に　バツス

満月の夜るはいつも、　樹の茂つた深い谿のなかに
さかり時の角鹿（つのじか）が咆（ほ）える、
臆病な鼠のやうにおだやかな足つきで
銀色をした金雀枝（えにしだ）の叢を通りぬけながら。

わたしは憧憬（あこがれ）の息づまるやうな狂暴に
怪しく捉へられ、　抑へつけられた、
そして、　私は私の胸に
あらあらしい燃焼を制してゐる涙を感じる。

［やぶちゃん注：この「カール・バツス」（巻末目次に拠る）は恐らく、ドイツの詩人・作家のカール・ヘルマン・ブッセ（Karl Hermann Busse　一八七二年～一九一八年）のことと思われる。サイト「研究余録　～全集目次総覧～」のこちらに、白凰社版「大手拓次全集」の目次が載るが、そこに『満月の夜に（カール・ブッセ）』とあるからである。
「金雀枝（えにしだ）」双子葉植物綱マメ目マメ科エニシダ属 *Cytisus*。ウィキの「エニシダ属」によれば、『*Argyrocytisus*（ギンヨウエニシダ属）、*Genista*（ヒトツバエニシダ属）、*Spartium*（レタマ属）など』実に二十五『属約』二百『種でエニシダ節（Genisteae）を構成しており、これらをまとめてエニシダ（英語では broom）と呼ぶことがある』とする。以下、エニシダ *Cytisus scoparius* について、『原産地が地中海沿岸の低木。開花期は春。明治期に導入され、湘南地方など』、『海岸沿いの温暖な砂地の庭木や』、『公園用樹として植えられている。また、この種は成熟すると』、『殻が激しく爆発することで遠くへ飛んでいくことが知られている。時には』十五メートル『ほど飛んでいくこともある。全草にスパルテイン、サロタムニン、ゲニステイン、スコバリンなどのアルカロイドを含み、有毒』とする一方で、交雑種ヒメエニシダ *Cytisus* × *spachianus* を挙げ、『原産地が地中海沿岸の低木。開花期は春。「エニシダ」として鉢植で売られているものは、実は本種であることが多い』とあった。なお、小学館「日本大百科全書」のエニシダの「文化史」の項には、本邦には延宝年間（一六七三年～一六八一年）に渡来したとされ、書物に出るのは、「増補地錦抄」（宝永七（一七一〇）年刊）が最初で、「エニスタ」の名を確認出来る。「地錦抄附録」には「エニスダ」と書かれ、後に「エニシダ」となったが、その語源はラテン語の「ゲニスタ」（genista）で、オランダ読みの「ヘニスタ」から由来する、とあった。］

灰　色　モツス

やはらかい灰色の長上衣を今着やう、
すつかり銀色してゐる柳のやうに。
わたしの戀人、　あの人は灰色を好みます。
牡丹蔓（ぼたんづる）のやうに絹の綿毛をもつて、
それは露のまきちらされた生垣に冠を貸します。
わたしの戀人、あの人は灰色を好みます。

夢のなかに包まれて私はぢつと見てゐます、
圍爐裏のなかに火の粉が光つてをりますのを。
わたしの戀、　お前は逗くへ行つてゐる。
やはらかな灰色の灰は落ちて剝れます、
この沈默の場所一面に煙の雲がただよひます。
そしで私はまた、　灰色を好みます。

わたしは灰色の光が夢みる所に眞珠を思ひます、
露のベールがきらきらすろところに赤楊（はんのき）を思ひます、
わたしの戀、お前は遠くへいつてゐる。
名高い、　人に知られた灰色の髪の人たちよ。
あなたの色の褪めた捲毛はうすい鳶色をしてゐました、
そして私は、また灰色を好みます。

小さい灰色の蛾は室のなかをとびまはります、
光りにそそのかされて
わたしの戀人、　あの人は灰色を好みます、
おお小さな夜の蛾よ、　私遠はお前のやうである、
私達はみんな光りのまはりをとびまはります。
沼地や銀河のなみに燈火（あかり）を見て。

［やぶちゃん注：**本篇を以って本詩集詩篇本文は終わっている。**第二連の五行目の「煙」は、その異体字で「グリフウィキ」のこれであるが、表記出来ないので、「煙」とした。

ホルベス・モッスは不詳。当初、アルゼンチンの作家で詩人でもあったホルヘ・ルイス・ボルヘス（Jorge Luis Borges　一八九九年～一九八六年）かと思ったが、「モツス」という発音に相当するネームは本名にも含まれないので違うだろう。識者の御教授を乞うものである。

「牡丹蔓（ぼたんづる）」双子葉植物綱キンポウゲ目キンポウゲ科センニンソウ属ボタンヅル *Clematis apiifolia*。落葉蔓性の半低木である。M.Ohatake 氏のサイト「四季の山野草」の「ボタンヅル」が多くの写真があり、解説もよい。そこに『花は繊細だが、家畜も近づかない毒性がある』とあった。

「圍爐裏」「いろり」。」

［やぶちゃん注：以下、本書の編者逸見享による「あとがき」、目次、奥附となる。
逸見享（へんみたかし）氏は明治二八（一八九五）年生まれで、昭和一九（一九四四）年没。和歌山県出身。中央大学卒業後、「ライオン歯磨」意匠部に勤務（後に同宣伝部に大手拓次が入社して親友となった）する傍ら、木版画を始め、大正八（一九一九）年の第一回日本創作版画協会展に入選、日本版画協会でも活躍した。「新東京百景」を分担制作している。「藍色の蟇」を始めとする大手拓次の詩集の装丁・編集も、殆んど、彼が手がけた（講談社「日本人名大辞典」の解説に拠る）。本詩集の編集・装幀も彼の手になる。**「藍色の蟇」は私は既にブログ分割版及びサイト一括版電子化注を既に公開している。**］

あとがき

ながいあひだ、私のあたまのなかを往き來してゐた拓次の譯詩集が、いよいよその風貌をあらはす時は來た。まとめてみるとまた一段とその光芒を增して來た。編者としてこれほど嬉しいことはない。欲をいへばいま少し詩の數があつたらばと思はれることであるが、それだけにひきしまつた、好いものが出來たかとおもふ。

これらの詩篇の多くは、彼の第一詩集「藍色の蟇」の初期の詩とおなじく、詩にくるしみ、精進と飛躍とをつづけた若いころの所產である。

かうした努力が如何にその詩作に影を投げてゐたかは、當時の彼の詩がほとんど過去の日本の詩に類例のない、異色のものであつたことを見ても知ることが出來ると思ふ。そしてそれとは反對に譯された詩は、どれもみな大手拓次の響することである。といふよりもまつたく彼自身の詩であることだ。

「惡の華」から「黃金の車」からまた他のいくつかの詩集から、異國の種を移して、ボードレールをサマンをグルモンをデーメルをタゴールを咲かせたつもりであつたらうが、どの花もまつたく彼といふ異香ある花に變つてゐた。この花こしは實に得がたいものであり、鐸詩としての立派な姿が期せずして示されてゐたのである。

この書の編纂は、發行を急いだため短期間になされた。それにもかかはらずこの良書を得られたのは、北原白秋氏、萩原朔太郎氏、藪田義雄氏からおのおの詩誌を拜借して彼の發表した最もすぐれた譯詩を移し得たに起因する。ここに三氏の御好意に深く感謝し、同好の諸氏にもともに喜んでいただきたい思ふ。またこの書を滋味豐かなものにと努力された澤田君にも厚く御禮を申しあげたい。

譯詩集を出さうなどとは故人も夢さらに考へたことがなかつたに違ひない、しかもかうした好著にならうとは。

生前酬ひられることの少かつた彼の墓前に供へて、その冥福を祈るものである。

紀元二千六百一年

逸見　享

［やぶちゃん注：「黄金の車」ボヘミア（現在のチェコの西部・中部地方を指す歴史的地名）の作家・詩人でジャーナリスト・フォークロア研究家でもあったフカレル・ヤロミール・エルベン（Karel Jaromír Erben　一八一一年～一八七〇年）のは、民間伝説や民話に基づく詩集「詩の花束」（*Kytice*：初版は一八五三年。全十三篇からなり、ドヴォルザーク晩年の交響詩（本篇を含む）や、ドラマの題材ともなった）に載る叙事詩「金の糸車」（*Zlatý kolovrat*）を指すものと思われる（以上は当該ウィキに拠った）。

「藪田義雄」は薮田義雄（明治三五（一九〇二）年～昭和五六（一九八四）年）で詩人。小田原市生まれ。当該ウィキによれば、『旧制小田原中学三年の時、その地に住む北原白秋の門人となる。法政大学に学ぶ（卒業したかは不明）。詩のほか、白秋の初の本格的伝記などを書いた』とある。

「澤田君」奥附にある、発行元の龍星閣の社長澤田伊四郎であろう。

「紀元二千六百一年」皇紀。本書が刊行された昭和一六（一九三一）年の前年。

以下、目次であるが、リーダとページ数はカットした。標題は概ね九字分の均等割付であるが、それっぽくした箇所もあるが、見かけだけである。］

異國の香

シヤルル・ボードレール

異國のにほひ
夢幻の彫刻
交通
憑き人
縁
香氣
音樂
幽靈
美しい船
踊る蛇
無題
病める詩神
高翔
信天翁

アルベール・サマン

秋

ジャン・モレアス

STANCES

ラビンドラナート・タゴール

螢

レミード・グルモン

薔薇の連禱

ヒルダ・コンクリング（十三歳の少年詩人）

古い眞鍮の壺
野のチユーリツプ

［やぶちゃん注：最初の詩篇の私の注で述べた通り、「少年」ではなく、「少女」である。］

ミンナ・イルピング

郡の市場

アンリ・パタイユ

溫氣ある月

ローラ・ペンネツト

若い女のやうな春

ジヨン・リチヤード・モーアランド

唄
アレキサンダー・プーシキン
Nereid
ギユスターブ・カアン
うた
テオ・ヴアン・ピーク
思出
［やぶちゃん注：ママ。本篇では「思ひ出」である。］
デーメル
お前はまだ知つてゐるか
沈默の町
リリエン・クローン
麥畑のなかの死
ホフマンスタール
二人
カミール・モオクレエル
あらはれ
溫雅
ガスタープ・フオルク
信心
カール・バツス
滿月の夜に
ホルペス・モツス
友色

［やぶちゃん注：以下、奥附。全体が二重の罫線（外側が太い）で囲まれてある。「大手」は底本では楕円の捺印。㊞は、国立国会図書館の「レファレンス協同データベース」のこちらの回答によれば、『暴利取締令の改正により』、『価格表示規程が書籍雑誌にも適用され、定価に「〇に停の字」の記号を付記することにな』ったとあり、『商工・農林省、暴利行為等取締令の改正により』、『価格表示規程を告示。一般商品につき』、昭和一三（一九三八）年の『九・一八価格停止令以前』の『製品は「〇に停」、その後の新製品は「〇に新」、協定価格品は「〇に協」、公定価格品は「〇に公」、許可価格品は「〇に許」の価格符号表示を実施』したとあるそれである。下部の記載は、三行空けて、十字下げでｗ配した。ポイント・字配はそれらしくしただけで、一致させてはいない。］

「異　國　の　香」　限定版

表紙ハ程村紙
本文ハ特漉鳥ノ子紙
本紙ノ刊行部數ハ六百冊

㊞頒價　貳圓五拾錢

大手

昭和十六年三月十日印刷
昭和十六年三月二十日發行

著者　大手拓次
編纂者　逸見享
發行者　澤田伊四郎
東京市芝區新橋際・復興ビル
印刷所　土井印刷所
東京市京橋區築地一ノ六番地
發行所　龍星閣
東京市芝區新橋際・復興ビル
振替口座　東京五〇六五
電話銀座一六〇二・四七六一

［やぶちゃん注：「大手」の検印は版権者の一人である故人の甥大手由五郎によるものであろう。

「程村紙」は「ほどむらがみ」と読む。サイト「那須烏山デジタル博物館」のこちらに、『市内の文化紙の名称は、市内下境の程村という地名に由来します。鎌倉時代の建保』『年間』（一二一三～一二一九年）『に向田村（現市内向田』（むかだ：ここ。グーグル・マップ・データ）『）で那須奉書が創製されたという伝承があります。程村紙ほどむらがみは「なす紙」の一種で、江戸時代の中頃には越前奉書、美濃なおし、関東の西ノ内等とともに最良の紙として広く知られ、江戸紙商人などにより、烏山和紙を代表する紙として売買されてきました。八溝地域は、原料の楮（こうぞ）の生育条件に適し、「那須楮」と呼ばれてさかんに生産されました。紙漉はこのてょう』（ママ。意味不明）『の農家の副業として行われ、特に下境地区では厚手の程村紙や西の内など上質紙を漉く技術が長く継承されてきました。楮蒸し、表皮（ひょうひ）取り、煮熟（しゃじゅく）、灰抜（あくぬき）、塵（ちり）取り、叩解（こうかい）、撹拌（かくはん）、紙漉き、圧搾（あっさく）、乾燥などの工程を経て生産されます。程村紙の用途は、薬種袋紙（やくしゅぶくろ）、公用記録用紙、大福帳（だいふくちょう）用紙、着物の包紙、傘紙などでしたが、明治・大正期には一時、西の内紙とともに国政選挙の投票用紙にも指定され、複数の県へ大量に納入されました。しかし、西洋紙の改良・生産拡大に加え、昭和』四十『年代以降、塩化ビニール製品が普及して、和紙生産は激減し、本市内で程村紙の技法を継承しているのは』一『業者のみとなりました。現在は、「山あげ行事」の山の貼り紙、卒業証書、版画用紙、押絵・財布・名刺入れ等の材料に使われています』とあった（リンク先に地図有り）。］

大手拓次譯詩集「異國の香」

オリジナル電子化注　©藪野直史　完